

特46

No. 16075



靜岡三世譚

一名靜岡案內

山岡鐵舟先生題辭
井上陳政君序文
關口默齋先生題畫
中村知常先生編纂

夢界道人校閱
有無髯史評
霞舟漁隱畫
諸名家題詩歌



發兌

靜岡大務新聞社

靜岡三世譚

一名靜岡案內

山岡鐵舟先生題辭
井上陳政君序文
關口默齋先生題畫
中村知常先生編纂

夢界道人校閱
有無髯史評
霞舟漁隱畫
諸名家題詩歌

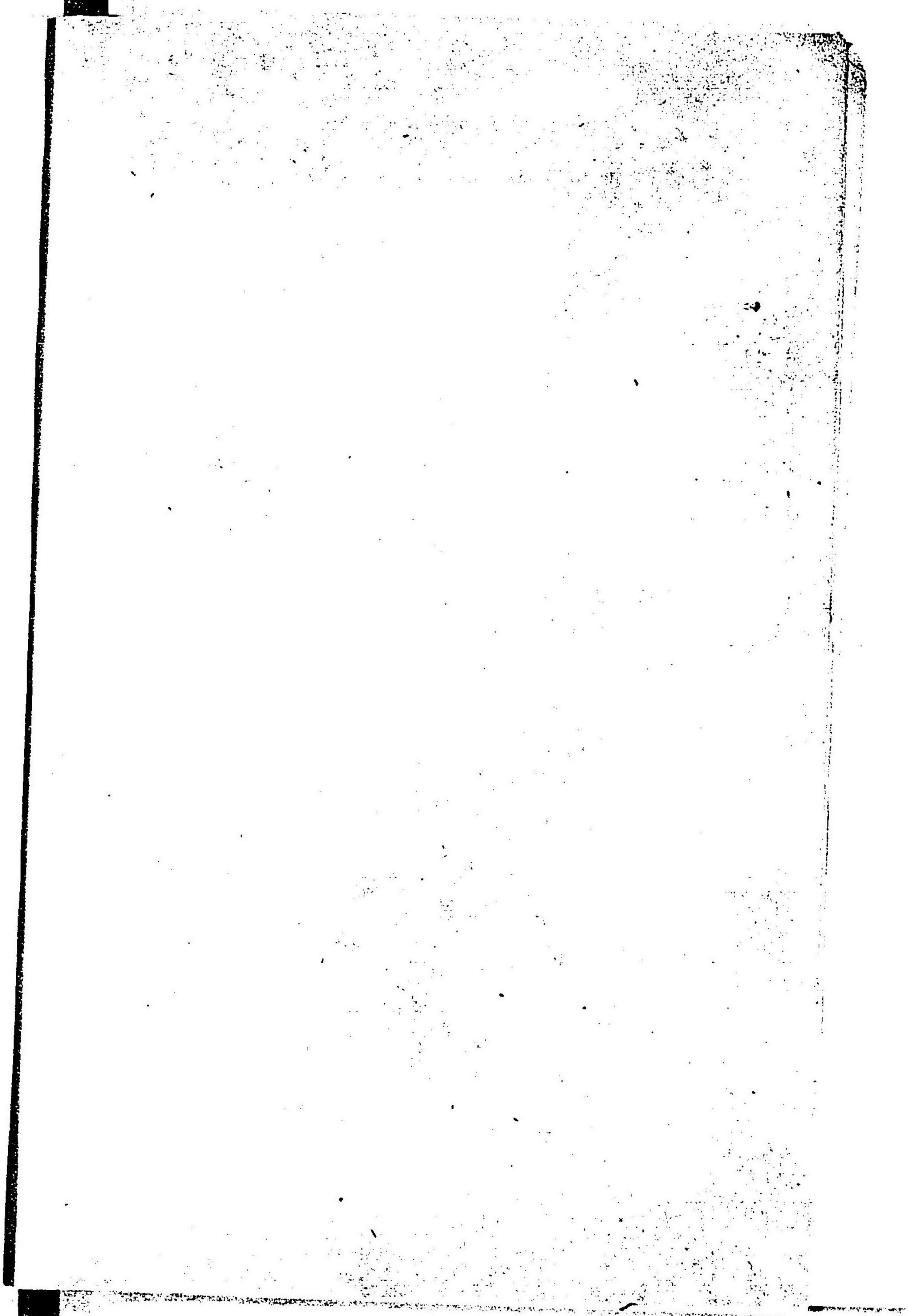
發兌

靜岡大務新聞社

山岡鐵舟先生題辭
井上陳政君序文
關口默齋先生題畫
中村知常先生編纂
夢界道人校閱
有無髯史評
霞舟漁隱畫
諸名家題詩歌

天
河

天
河



茶園



昭和二十一年十月

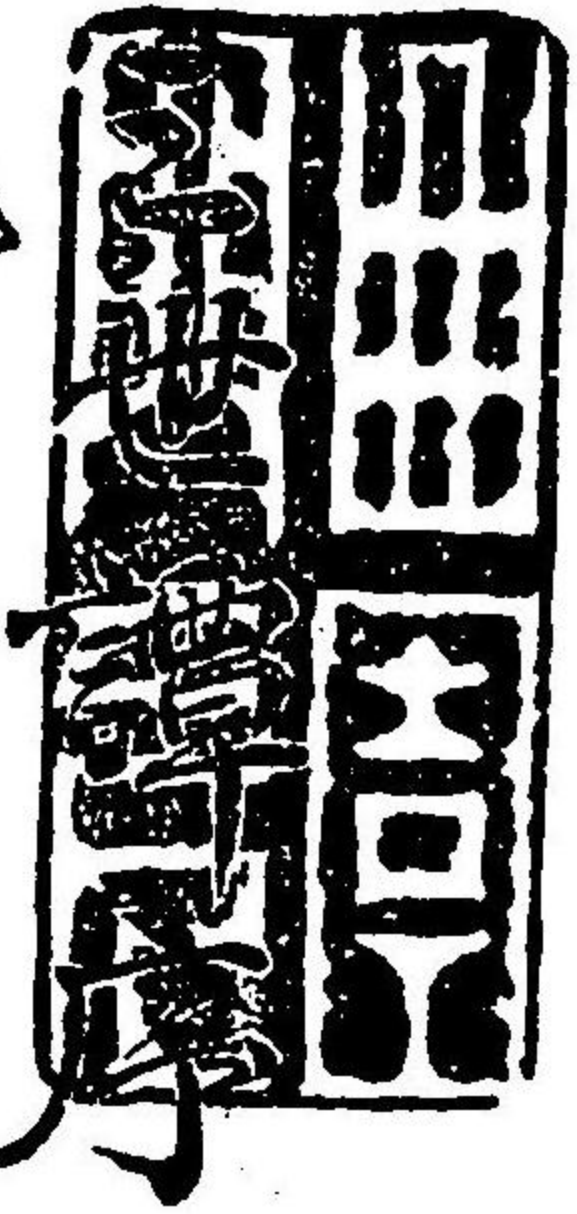
城野山園主





漢書地理志

卷之七十四



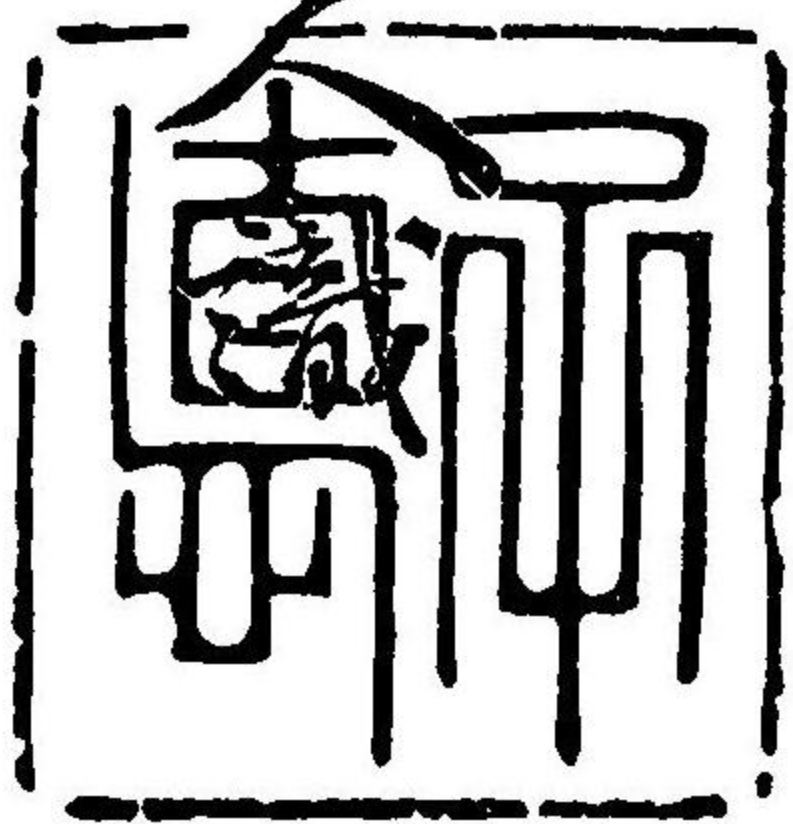
風土篇。居史一。蓋上自版圖。廣狹。戶口。多寡。都邑。建置。岡陵。形勢。川脈。貫通。田畝。肥瘠。物產。繞。各。下。至。園。苑。登。陟。寺。祠。游。覽。暨。閭。巷。歌。謠。紳。俗。異。宜。莫。不。備。載。

故有志者重之。吾友中村翁年
近耄耋。好學不倦。退居靜陵。彙
輯少見。旁搜異論。以辨述。忍
既域見示。余曾多為。點達於物。
不干世利。又喜世著也。垂御俗
之美於不朽。而不戾於古者。記述

之意。於是。亦敢言於老端。

以子

慕願學



三世譚序

花叟老爺。好遊。輕裝單杖。跋涉山川。老而益壯。嘗航于清國上海。及歸。取陸路。不敢借舟車之便。舊跡勝區風俗形勢。耳目所觸。神心所感。隨書隨畫。收之行李。題曰轟談。丁亥仲夏。自東京來。移靜岡。僅閱數月。東行西往。一日不息。暇則出游。賤機之櫻。麻旗之蓮。吐月峯之幽邃。當目嶺之壯觀。措而無論。備盡市街村里之廣狹。與人情風俗之微細。遂有斯著。嗚呼。老爺善遊者也。故假令老爺優游。曳杖縣下三州。二十三郡之間。躋攀登尋。而有所述作。則其益士民。蓋勝海外奇話也。遠矣。予延

頸以待其書相尋上梓云。

明治二十年。天長節後一日。識於東京客次。

夢界道人正

自序

靜陵に移る住む僅に數月とを此地乃風俗事情を
探る知る所とは是れ隨て見聞も廣らぎ物事また
ゞ珍らるゝて。老乃癖として忘れおと筆を採る紙
片も稍積るぬ。或時茶話乃折柄友人乃曰を是を一
小冊とあふあは又をのちかるべにいと煽動され
て我面白。下地は好まを御意まかせ。膏盲乃物に恐
れを先表題とを考るに。

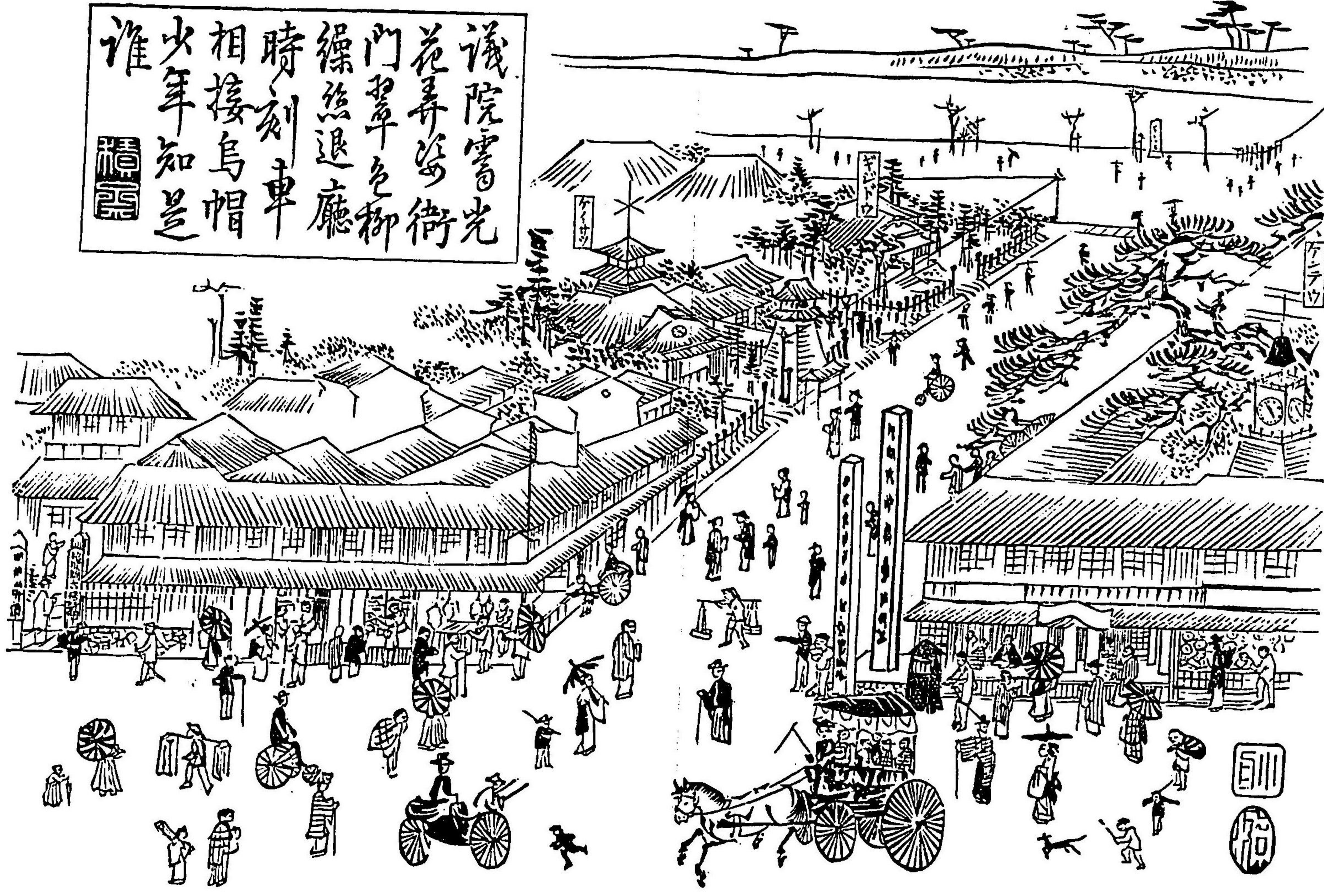
「死乃ふ阿ればはふも阿るはを巡る日乃今日阿れ
はあそ阿すも阿るは」と。古哥乃趣向を思ひ合ふ

て。三世譚と名をおはす。初の現世乃をまことぞと過
去は名士乃昔語を。未來は開化乃隆盛に局を結ぶ
と。腹稿の粗きぞ見ても。もとを所らぬ智囊を緝
り。振ひ出きて上帙乃は左書に記す

于時明治廿年時雨降南窓の下

花 咲 翁 識 す

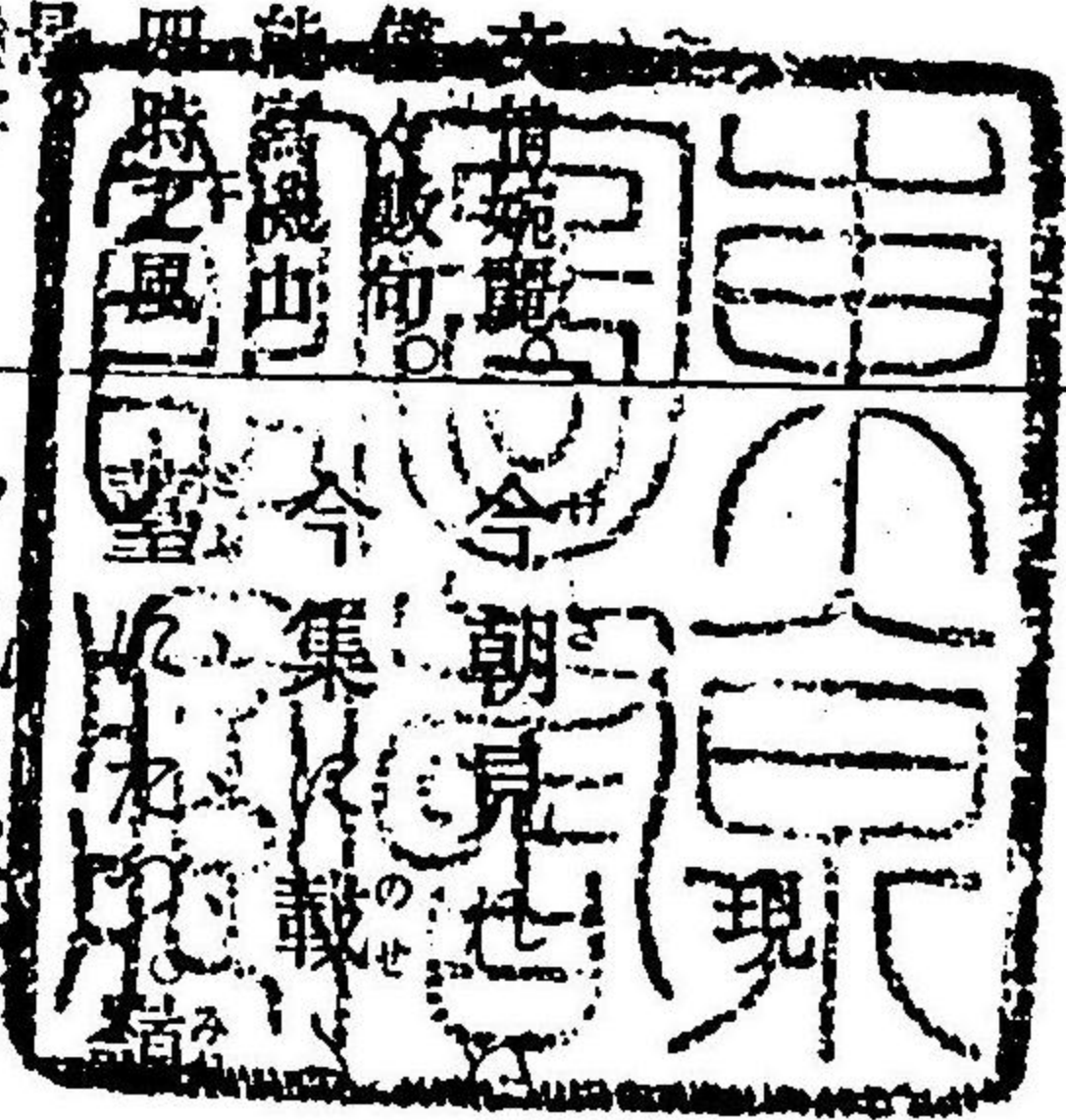
議院雲光
 花弄姿街
 門翠色柳
 縹緲退廳
 時刻車
 相接烏帽
 少年知是
 誰



國
 福

静岡 風俗 三世譚

静陵 花咲翁編述



先現 一人

世 霞の衣織かけて賤機山に春は來にけり」と新古
 りしも。いまはむりくと春の日もいつか杉菜と
 なす雲に夏木立暑さも薄き蟬ぎぬの袂に通ふ
 夕風の涼しさ告る秋はまゝ錦織出す此山邊の冬はこと更
 銀世界四時折をりの眺望をば尋ね登りし一個の旅客東聘
 西顧と杖を曳ぎ淺間山の透迤大巖村の頂きに年経る松の
 根本に腰うちかけて暫時のほゞ少く勞脚を憩ひ居たり。
 其人品を見てあるに。年の程三十路あまり。頭に麥稈の帽

子こをいいとゞとゞぎぎ。紺こん飛ひ白はくの單ひとへ衣ぎに。淺あ黄わう色しきある兵へい兒ご帶おびをしめ。
 白はく金こん巾ぎんの襦じゆ衣いに「ツつボぼン」下したを穿うがち。脛しりを端は折せり。肩かたより象ぞう皮ひの
 「カかバばン」を斜ちやうに背せ負せ中ちゆうには一いち二に領りやうの着き換か衣いに。三さん四し本ぼんの「ブ
 ツつク」をや。入いりりと思はるは。是こゝに開あ化くわの。名な所しよ見けん物ぶつ
 左さ衛ゑい門もんとも想ま像ざうす。何なにか心こゝろに思おもふ事こと有ありて袂たもとより「マまツ、
 ナ」を取とり出して摺すり付つけて。「ロろンどン」製せいの「シしガがレれツつ」をくくももら
 一いち。詩し歌かにても考かんがへ出いさんか。抑おさも耳みみ目めの觸ふる所ところ感かん觀くわん興きやう起き
 するものあるや。其その心こゝろ裏うらに立た入いて見けんざれば。此こゝに詳しょうに記きす
 に由よしあり。頓とんて頭かぶを徐じゆに拾かたげ。心こゝろにうなうなづづき獨ひとり語ご。
 寫あ摩ま何なに處どこから見けんても。變かわらぬものは此こゝ富ふ士し山さん群ぐん岳がくの間に屹ぎ
 立たい。巍ゑい然ぜんとして千せん秋しゆう一いつ日にちの如ごとく。時ときといては。綠りよく衣い白はく裳ま紅こう霞せま
 の帽ぼう翠すい烟えんの帶おびに身みを飾かざり時ときといては。徹てつ頭とう徹てつ尾び純じゆん白はくの衣い裳ま

一いち。點てんの俗ぞく氣きあく。其その外がた貌ぼうは變かわれるも。其その内うち部ぶは古こ往わう今こん來らい。更さら
 に其その本ほん分ぶんを失うしなはるは。又また人ひと間まの標ひょう準じゆんにいて。實じつに我われ東とう洋やう人にん。
 士しの思し想さうも斯ごとくありたき事ことずらり。
 と少すくく長ちやう大たい息いきの趣おもむあり。少すく頃くわんして「カかバばン」より雙りやう眼がん鏡きやうを
 取とり出し。兩りやう手てにて眼がんに當あたり。やがて右みぎの手てを伸のべ。捻ねじをままは
 一。先まづ北きた方ほうの山さん々々を見けんわたり。東とう方ほうに及およぶ。とする時とき。一いち片ぺん
 の白はく帆はんを。蒼そう海かいの間に認ためたり。
 ハ、ア彼あつこ所ところが興きやう津つ宿じやくとすると。此こゝ所ところが清せい水すい港かたにて。摸も糊こたる
 一。抹まの島しま嶼しよ。三さん保ぼの松しょう原げんよもあらんか。
 と順しん次じに眸ひまを東とう南なんの部ぶに轉てん。遠とほきより近ちかきに至いたり。
 彼あつこ所ところが過あ刻こく通つうりか。り遙やう拜はいせ。草くさ薙なぎ神じん社しゃの鎮ちん座ざまます。
 有あ渡わ山さんなららむ。彼あつこの山さんの裏うら面めんはをかた。久く能のう山さんにもあるべ

りらん。山鼻より右に松並木が見ゆるが。あれは。ユーツト。安倍川の東注入海とでも云ふ所あんめり。其向ひに圓山突出して。海面に浮み出さる如きは。何といふ山あらん。ム、豫て話に聞たる。虚空藏を祀る。當日村の近所にて。石部とか云る所あるか後に断岸絶壁を貫ひ。前に汪洋滄溟を控へ。往時は「見上間敷」と俗間に言傳へし。今大崩と綽號して。奇景に富みたる地にてや。あらんすらむ。餘り景色好看に見惚頭を振りたる故にや。頸が草臥たり。先一吸と致そふ。

と又「マツチ」の箱を出し摺付るに。一陣の清風。颯と來れば。其火光を見るも「シガレット」に移す能はむ今一本を出しこれをも復た消へれば。是非なく立て松の木影に身を寄せ。風を遮へて。漸くは一縷の烟を吸得たり。常に勝り

又現一人
暗以老人
比黄石公
以壯士比
張子房歟

高味の心地せらるべし。

折柄何處より登り來りか。一人の老翁。身に鶴衣やうのものを着し。藜の杖を突き。徐々とあゆむ姿を睨視やれば。風さのみ汚穢けにもあま。さりとして。又美麗にもあらざ其顔色容貌は。自然異相を逞し。品格高く。舊幕府旗下の隠居とも見られ。まゝ眼光爛々として。人を射る。老て益壯なる氣象は。何となく表面に顯然。天保時代の優柔士族には。あらざるべしと。知られざり。されば英雄豪傑の僚倒にて。此邊の山間に遁逃したる。人にもあらんか。年の程は彼の頭髪鬚髯の白雪を欺く如きにて。古稀以上の趣あれども。童顔鶴容。常の人にはあらざるべく。思はれたり。やがて壯士の傍に來り。

六
翁甚卒爾ながら物申さん。先程より貴殿の舉動を見るに。蟹の眼の如き。飛出たる物を。おのれの眼に當て。東西南北と見渡す。自得せらるゝ様子。いかにも不審千萬なり。隨分此山へ登り。春花秋月の景を稱す。詩を作り。歌を詠み。油畫に寫とぞ。文章に綴るなど。はなはたしきと。飲酒舞踏の。殺風景の振舞も澤山あれども。貴殿の如きは。徒に風景を稱するとも思はれぬ。又詩歌を弄にもあらぬ。さりとて諸國を漫遊し。山川を跋渉し。天下を看破したる様に。演説などなすにもあるまじ。風流閑雅を口藉き。異様世の中に關係せぬにもあらざるやうなり。老翁。此年頃。初て出逢し奇人ありと。星をつけしは我僻目にはあらざるなるべし。

問れて壯士は蹙起兩手を膝のあさりへ下げ。腰を屈めて。

慇懃に老人にむかひ。

壯御問ひを受て却て恐縮。實は拙生事は故あつて。姓名は。ナト申あけかねますが。頃日思ふ子細ありて。東京を發し。東海道を経て。中國筋より九州地方へ。遨遊ものなるが。もとより拙生は。赤面ながら。無學無術の一閑人にて。中々唯今の仰の如き。仁物にこれなくさむらふ。

と語半に老翁は。天を仰て一咳し。

翁コレ々旅人。其謙遜辭讓は人にこそよらめ。翁に天眼通はかけれども。とくより貴殿の心意を知れり。先其大畧を申さは。二十年來。螢燈雪明の學問は。要之諺の疊水練なり。是より志操を發憤して。東遊西涉人情風俗。あらゆる事情を探知し。實地の學問を講究して。他日の用に供んと。の外に餘念はよ

おあるまじ。乍去此に一つ老翁が思考あり。人情風俗を探らんとする。事は易きに似たれども。中々探知といふは難き事にて。先一縣下にしろ。一國にもせよ。滞在僅に五日十日にて。其大畧たも知るによしなし。まして一日半日にて。旅舎主人に問ひ。新聞の探訪者位に質問し。何縣の政畧はとふたとか。何國の風俗は何たのと。一人極めにて意氣揚々と得意顔にする族もあるなれど。是等を以て可也と思ふは。誠に埒なき次第なり。翁の若き頃は。中々今日の如き。開明の御代にもなき。且西洋各國の人物といへば。阿蘭陀人より外は。夢にたも見ざりしが。老翁少く志ありて。或蘭人に交際したる時。彼より我東方の風俗を探るに。日用坐臥の細事より問起し。山の高さ。川の廣さ。道の幅土の質と。通辨官も舌を爛す位にも

风光
万里
正高迁人



小舟畫松石景



及びしが、其後追々世の進歩に隨ひ、英米魯佛の諸學士が。我邦へ遊びと日記等を閱するに、猶其微細の事に及ぼしたるは。自國の我々も知らざる事迄を、記載しあるものありと覺へたり。貴殿が此度遊歴も、定て此に注目せられたりかと。思はれたれども、抑今老人の話は、今日に於ては、如何おほすや。言の序に申なり。

と聞て壯士は猶更に、其人品の奥めかく、手を拱て言るやう。

壯唯今の御話の、所謂先獲我心者とかにて、實以驚入たる御眼力。斯なる上は更に御隠し申事なし、若老先生僕の愚昧を捨給はせ、教めべきものと思ひ給は、暫く此所に座し給ひ、篤と御教示下されたり。就てひとつの御話あり、先年拙生が

在京中。或政事老練家の許を訪ひ。彼是の話の序に。僕に對は
れ。足下は馬琴の八犬傳。春水の梅曆を讀れとや。此等の
小説をどくと讀み解うるものは。人情はよく知りて。何時に
ても政事は執れるものよ。戯言ながら申されしが。素より
老練家の言なれば。腦裏に記憶しおたりと。今老先生の
教言を拜承するに。つけても。感悟する事又多かり。何卒恐入
ますれども。此に一座せられたと。

とあたをを見れども敷物としては更になし。袂を探つ。一
「ハンカナイフ」を出し。カバンの中より。本を包みし風呂敷
をはぎ取り。其上に重ね。是へと頻りに勧めければ。老翁う
なづき。扱々奇特の量ひよ。芝草を敷物とし。木乃根を枕と
する。老人なれば。其敷物は無用なぞ。もと乃所へ仕廻へか

と莞爾と笑み。かたへ乃松の幹によそをひ。其儘そこにぞ
座をいめたぞ。壯士の喜び一方ならず。恭く手をつりへ。
壯最速乃御承引。難有事此上あり。就ては先程の仰のどとく。
一縣一國乃人情風俗は暫く置き。今此山巔よを見渡す所の。
市街たけにて宜敷ければ。質問に隨ひ。一々御答下されあは。
實に僕が大幸にして。何乃賜か是に及ぶま。何卒御許容下
されたり。

と述るを聞たる老翁は。ハツタと膝を打あがら。
翁さこそ思へば先刻よ。餘計乃言まで申せしな。決して遠
慮はいらざれば何あとも問ひ給ひ知をたる事ハ物語ら
ん

開口先問
戸數人口。
眞是經世
之士。

壯左様御座れば遠慮なく先第一に御問ひ申たさは當地の
戸數人口なり

翁さればとよ戸數は慥か六千八百七十餘戸にしてまた二
萬にの足らざる人口は縣下にての縣廳もある地なれば
當所が一番多數を認め三萬五六千人計と聞り
壯してまた市街の幅員

翁東西三十三町六間餘にして南北二十六町五十間計なを
壯町數

翁百拾六ヶ町。其内貴殿なきが聞取得ぬ。町名あを所謂國訛
にて。馬場町。江河町。鑄物師町。研屋町。清水尻。など此外にも此
類多くあを。さまでい要なければ。畧すべし。
壯市街の都て一郡なるや。

不覺吐露
丹心。

翁左にあらむ。安倍有渡乃二郡に跨り、四十一ヶ町の安倍。五
十六ヶ町の有渡郡あを。尙巨細に申なば、吳服町といへる町
の南側の有渡郡。北側の安倍郡。又本通を。東側安倍。西側の
有渡にして。猶また西北の部に。横内町といへるあを。是も東
側の安倍。西側の有渡と。斯くの犬牙錯雜。一寸見渡した位
にては。分を難らむ。

壯成程僅々たる區域にて。如此繁雜ならば。施政上。又幾分か
の不便を感ぜべし。扱こそ一おき。静岡區に變換せらるべ
しなご。風評もあを。よくに聞たを。初て思ひ當をた
ぞ。

翁コレ是旅人兎角貴殿の直に施政上の政畧のといわる、
が。夫等の利害得失は。素方賢明ある。夫々當局者のあるあれ。

は。先其政事談めきたる言の吐くを止められよ。

と心付られ。いかにも御最の事ありと。是より又眼を放て。遙に見渡し。

壯抑あれなる舊城廓の。何れの年。何人の築くなるや。俗間には多田の満仲が創造に係るとか。今川義元とか。聞し事あり。されども。果して然るや。御説明を願たし。

然らば老翁の知りたけの。委く御話し申べし。先其創築の年代の確との認め難けれども。天正十四年徳川家康公が。城を駿府に築き給ひ。濱松城より移りたりとかの事。歴然として。徳川代々の記録に見へたり。去ながら愚案には。其以前今川氏乃時より。若様の物はありしと思さる。又徳川氏築城の後。即ち天正十八年。豊臣秀吉中邨一氏を此地に封し。

十四万石を賜り。慶長五年の冬。東照公韮山の城主。内藤信成に。此城を賜へり。信成江州長濱へ移り。家康公御隠居後。常に此城におはし。公の薨去せられし後。第八子頼宣卿の居城とす。元和五年卿の紀州へ移られし時。秀忠公の二子。忠長此城に居り。寛永九年叛逆の企ありて。死を賜ひ。其後は都て留守居を置れし。能世人の知る所あり。されば。今にも城内に舊跡多し。其外廓より説起せば。眼を留て能く見給へ。あれ南方に二ヶ所の城門の跡あり。手前を四ツ足門といひ。先なるを追手御門といふ。内に御城番御城代等の屋敷あり。御普請小屋あり。東方は横内御門といひ。内に忠長卿の老臣興津河内守の屋敷あり。今なを河内屋敷と稱す。東北の隅に組の者の小屋敷多あり。北方の草深御門。其前面の二

の丸なり。立石御門あり此門の右側に巨大なる石あり上に四ツ目結の紋を彫付け、側面に假名よて「りささい」とあり刻付てあり、即ち此城創造の頃、夫々諸候に課役を申付られし其内に、京極若挾守もありて、此立石御門を受持たりあり。今猶麥畝の間に存在せり。なを二丸一門あり。東南は東御門、南方は二丸大手、北方は御天守下御門と稱し、斜に立石御門と相對せり。夫より御本丸と稱へ。其他御櫓御天守臺御藏御金藏石火矢藏或は御手植の梅、矢來の蜜柑、蛇形の蘇鉄、兒さくら、種割梅、逆柱など、大凡二三十種の古跡あれども、餘り煩はしく、且要用にもあらざれば、聞たくは御話し申べけれども、貴殿のこゝろいかによ。

壯御最の仰猶伺ひ度へ存すれども、徒に古跡をくへに流る

頃聞前將
軍、移城中
古木于其
邸、是此梅
櫻、亦得其
所哉、

所以著三
世譚

も拙生の本意にも非らざるあり。さぞとて古人の申。温故知新とやらにて、時として、現在の形状を探らんとする時、勢ひ過去に及不す事あり。され、重に現在のありさまをうけたまはり、序によきては、過去をも御説示願ふ。

翁是又最の説なき。是よを更に問を起されよ。

壯城廓の幅員、廣きようなれども、何程位あるものよ。

東西六町、南北六町六拾四間、坪數にして凡、拾四万八千九百五拾五坪。今は陸軍省の御用地なき。

壯廓内は如何ある形ちをなしおるや。

翁四足追手の二門の内、師範學校生徒の、運動場あり。他はちらほら家屋あり。横内門内、十餘軒の家屋あり。且山林局出張所も此に在りて、其他は都て、麥畑茶畑あり。

壯其地の誰人の拜借せらるゝや。

翁當地に於て、殖産興業の熱心家笹間氏等が借地して、大に開墾せられたれば、今の昔の跡かたひ。更に存するものあり。壯某氏との拙生事も兼て其高名を耳にせし。彼の士族同胞會とり稱する。會社を組織せし人あらん。

翁さればなり。あれあの城の西北隅に。物干臺よりの物見ゆる。一棟の家屋ひ。即ち某氏の居宅にして、多く婦女を集めて。「あづはゝ織」といへる帛を製し。又夫より先きに。煉瓦にて積立し煙筒あるひ。岳陽社其稍々北に「フラフ」の柱あるひ士族授産場にして。皆某氏の管轄に。歸するものといふも、可ある也。

壯成程さすか高名の人の爲せし事業だけありて。實に盛な

る事あれども、近來の實況の如何にや。

翁さればとよ。老翁もよく知らねど、物干にはほしものもなく。柱に「フラフ」もなく。煙出しに煙りがなければ。此骨折も煙のどとく。暫時立消の姿あれども。再び煙の立昇りて。國産を赴す様に。ありたきものなり。

壯左様なれば、此一話は扱おき。あの煙突の所の。何と云へる町なるや。

翁彼所の横内町。或ひ水落町といへる所。其手前が。草深御門。外の元加番屋敷なり。是の城番の加番として。旗下の士。年々交代して勤め。其役宅のありし所なり。最も城の三面皆加番屋敷なり。東を一加番。北を二加番。西を三加番と云。今日にも土地の人の。綽號同様に呼ひ。其名のみ存せり

壯城の南面に當り。粉壁高屋なる。静岡裁判所。其次は師範
學校并附屬小學校と。幼稚園あるは。過刻経過せし時に認め
たれとも。そもあの邊は何町にして。元は如何なる地にてあ
りしや。

翁されは彼所は四足町にまて。裁判所の一構は。往時は御城
番と。町奉行の下屋敷なり。

壯縣廳は定て彼の近所と思はれされとも。見當らさりしや。
こゝより認め得らるしや。

翁さもあらん。始て當地へ來る者も。誰も一寸は。氣が付かぬ
者多し。今謂れし學校の地續の角が。議事堂にて。夫にならび。
巡查教習所。静岡警察署。道を隔て其向に。一老松蒼々として。
雲龍の蟠る如きありて。長屋門を掩へるは。おれが我が静岡

縣廳なり。元來此地は。少將社の鎮座せる所なりしを。駿府御
城代なんどの役を設けられし際。少將井廟抑も少將井廟と
梳神社にて素蓋雄命の如稻田媛の命を祀る初城中にあり
り寛永年中新谷町に遷し後今の所に移しまつると云を
移し。跡を町奉行所とはあせしなり。されバ門のかたはらの
老松を。少將の松と稱したり。町奉行所の後。今教師室御目付
屋敷なり。此邊を追手町と呼へり。

壯此よ見渡す所にては。縣廳は餘り。立派にも見受られず。
されども内部は定て。整頓せし事ならんや。そもく如何に
や

翁イヤ夫よつき一奇話あり。凡日本四十余縣の内。此縣廳の
如き。みをほらしき官衙はあらずといふ。乞食縣廳なと。惡
口する者もありて。他縣人に向ては。耻らしき事と。思ふもの

果然

も少からず。然るに。先年或縣令が赴任の後。此事につき申さるゝよう。衙門は狹矮惡穢にても。政令法律が寛裕美麗あらへ。何も妨げはあるまじ。との説出てより。縣廳の矮惡あるが。却て當地の名物とはなり。可笑。去迎。追々國會の期も逼り。地方制度の變更もある可し。と人の噂に聞されは。其内必ず。大厦高樓の。縣廳も落成する事と。思はれたり。

壯 壯 とも治安裁判所は。幾郡を管轄するや。

翁 翁 されはなり。庵原。有渡。安倍。志太。益津の五郡あり。

壯 壯 静岡警察署の。分署は幾何にや。

翁 翁 江尻蒲原の二ヶ所なり。

壯 壯 師範學校の教師生徒の。現員は何程なるや。

翁 翁 教員十五人。生徒百五十人計と聞ぬ。

壯 小學校の現數の如何。

翁 翁 有渡安倍二郡にして。合計七十餘校。其内有渡三十四校。安倍四十校計なぞと云ふ。

壯 壯 郡役所の何れの邊あるや。

翁 翁 あれ見られよ。追手門の外。向ふ角が郡役所なぞ。數年前は。女學校なり。それに添て。細き横町をゆけば。戸長役場あり。是則追手町。外三十何ヶ町を管轄す。此外四ヶ所あり。茶町。本通。七軒町。譽田町なり。

壯 壯 先程より承るたる。四足町とは異なる町名にて。昔時獸物の類にても賣捌たる所にてもありとにや。

翁 翁 イヤ左にあらざ。貴殿壯年あれば。事の由を知らざるは無理あらざ。是も一つの典故なれば。御話し申べし。とも往古よ

不說中學
校事。不語
淺間社事。
想作者將
出之於過
去未來二
篇中歟。

東照公、不爲此借擬之事、按新風土記、今川氏時、既有四足門之稱云、

を禁闕の内に。四足御門といへる御門あり。通常の御門と違ひ。柱が四本にて。古代の畫卷物なごに。往々其圖あり。さて武家に於て。中々是等の御門を。建る事は六ツケ敷。あれ共。王室衰微の頃。足利三代將軍。義滿の時。時の天子より御許容ありて。室町へ此門を建られ。後は絶て又此事あらざりしが。家康公御隱居の後。再び古例によりて。此城門を設けられ。なり。されは往時の。四足御門外あるを以て。今でも四足町と申あり

壯町名を質して。一の典故を承り。は。亦難有次第あり。近來は萬事新奇を競ひ。舊例なご。都て。度外におくよ。自然に自國の事。疎く。四足と聞き。直に獸類にひとしきと思ひて。御問ひ申す。淺學の恥いさよ。

食牛書生
針砭

と頗る慙愧の顔色を顯しさり。

翁イヤとよ。左程に慙べき事にもあらざ。唯知らぬ事。知り人にて問て。後に知るとの御了簡に。感服せり。近來の少年輩の知らぬ事迄。知りしふりをあすもの多く。辨にまかせて慙着て。よい事と思ふ故に。知らぬ事いよく。あらぬて。終るは小人の甚きものあり。さすがは貴下。心掛のよきものよ。此後も能々。注意せられたと。壯痛入たる其御詞。ますます。慙愧に堪ぎ。扱夫のそれと致。彼の銀行の。何所にこれありや。

翁今話の四足町を過ぎ。吳服町一丁目乃角が。第三十五國立銀行にして。明治十一年五月の創立に係り。株金の三拾万圓。とか聞きぬ。猶他に同町に私立野崎銀行あり。株金は五万圓。

なりとか申す。

壯 國立銀行の頭取は誰なるや

翁 小林某にして。元々下野の人。舊幕府の末。脱走して江戸に
來る。夫よを段々出世して。遂に今日の地位に至りたりと。
言傳へりと。聞し事あり。また西の方の町を。上魚町といふ。往
昔金座あり。一小路を隔て兩替町とて。銀座のありし所なり。
慶長十五年に至りて。江戸に移す。錢座の北の方。沓谷村とい
ふ所にありて。明暦二年。寛永通寶貳百萬貫を鑄造せりとか
いふ。

壯 アレあの東の方に。寺院の如き高屋を認めたるが。彼所は
何なるや。

翁 即ち當地屈指の寺院にして。金米山龍泉寺と稱し。徳川二

代。秀忠公の御母堂。西郷氏を此に葬られしよし。其釋謚を取
り。寶臺院とは申なり。往時は江戸。上野。芝の。兩寺の如くに
て寺領三百石ありしが。今の漸く荒れて。獨其名の高きの
み近頃寺僧。食殿建立主義に出しにや。成田の不動尊の。出
張所を設け。毎月廿八日。一の小縁日をこしらへた。此境
内にも。種々舊跡もあるならんか。東照公御手植の蘇鉄。また
不斷櫻とて。大木あり。四時花咲出ると。聞たれど。今はいかに
や。

壯 アノ手前に。鬱葱と森乃如き中に。一構の邸宅様の見える
の。何あるや。

翁 あれこそ。前將軍徳川慶喜公の御邸なぞ。土地の人民の。前
の將軍なるを以て。さきさまと申。又。紺屋町に御邸あれば。紺

今春移邸
于西深町、
紺屋町様
稱亦一變、

屋町様とも申あそ。

亦是輕薄
子針砭

と聞くよを旅人は何故か容を改め、長揖して、遙拜の禮を行ひたれば、翁は少く聲を潜め。

翁貴殿もまた舊幕府の臣子にあるや。

壯は異なる御問ひにて、老先生乃御詞とも存せられぬ。拙生の素方、先祖以來幕臣にあらざれども、前將軍と承り、争てり遙拜せさらんや、近來諸生の常態の、時勢の變革も、國體の遷移如何を顧ぎ、徳川といへば、叱咤罵詈の風あそ、幕政と聞けば、壓制專斷と、難擊駁論、家康と呼び、慶喜といひ、頑然として、大言高論自得の色を顯すは、是より後五十年、百年の星霜を過あば、兎まれ、角まれ、今願て自家の父祖を視れば、上下貴賤、官民乃別あく、誰か徳川氏の恩澤を蒙らざるものや。

眞然眞然

亦是輕薄
子針砭

亦是輕薄
子針砭

あらん。いは、前將軍等を、叱咤罵詈するは、即自家の父母を、輕蔑排撃するに均しく、心あるもの、所爲にあらざる乎と、愚考せよ。

此少く眼に角立て、申ければ、老翁いよく興に入り、扱々我目に違はぬ奇特のものよと、感トつ。

翁若く貴殿が舊幕府に縁ある者にして、此議論が出るあれば、左のみ稱賛するにも、足らざれども、左はなくして、如斯高論卓説を、陳述せらるゝの、實に多く得かたき人物なり。

と稱賛すれば、旅人は今、何と答へんようもあく、頗る手持無沙汰の、ようすあれば、老翁やがて手を伸し、一つのいや高き三層樓を指し。

翁アレ見られよ、あれなる樓は、當地有名の酒樓あり。

と聞て旅人の。兩臉に笑を含み。左様にてこれあるやと。口を箝めて。また別に問ふ事あらんとの。おもむきの見へたれば。老翁の笑ひあがら。

翁是々旅人酒樓と聞て語を續ざるの。定て思ふ子細あるやらんか。此老人の兼てよぞ。風俗を採知し。又世の好景氣不景氣を卜し。世態人情の。冷熱を辨むるの。酒樓妓樓に。よくものあらざるべく。と思ふなり。回顧すれば四五十年前。老人江戸にあるとき。隨分放蕩トみし事もありし。さりあがら。世の生書生や。偽英雄の。毎度口を是等の語にしき。僕が登樓聘妓の。遠くの大石良雄の。祇園町に遊びしに。均しく。近く。頼山陽が。引手茶屋に。外史の稿を起せしに。同ト。なご。口頭計の言譯にて。深く其の心膽を探り見るに。愛國の志あく。徵兵適齡

讀此一段。
或有慚死
者。

たと聞けば。青くあきて。作病あて。遣ひ。軍醫に見顯されて。赤恥をかき。又郷里りら送る學資は。書籍も買せ。賄料も拂はせ。束脩月謝の。いつも花柳の衢に擲ち。覺へるもの。都々一はうとの一二のみ。ミルの經濟も。法律も。本の面を見た計で。目的更達せせ。遂に其身を滅して。父兄に戮を貽るの類の。方今天下に澤山あるように見受たせ。さりとして一度も。此地に入らざるもの。物の用に立ぬと。或粹士の言なれども。味よきもの。毒あり。深興あるもの。弊害ありて。即ち一利一害。事物の間に免れざれば。唯々。俊才英士の此利害を計りて。使用する事あり。思ふに貴殿の。今代の英士。此老人の能く知り。されば今迄の話に代へ。打て變て花柳社會の雑話も。亦長談議の一興あらん。必き避くる事なりれ。

壯也。聞て旅人は何か感むる所ありや。

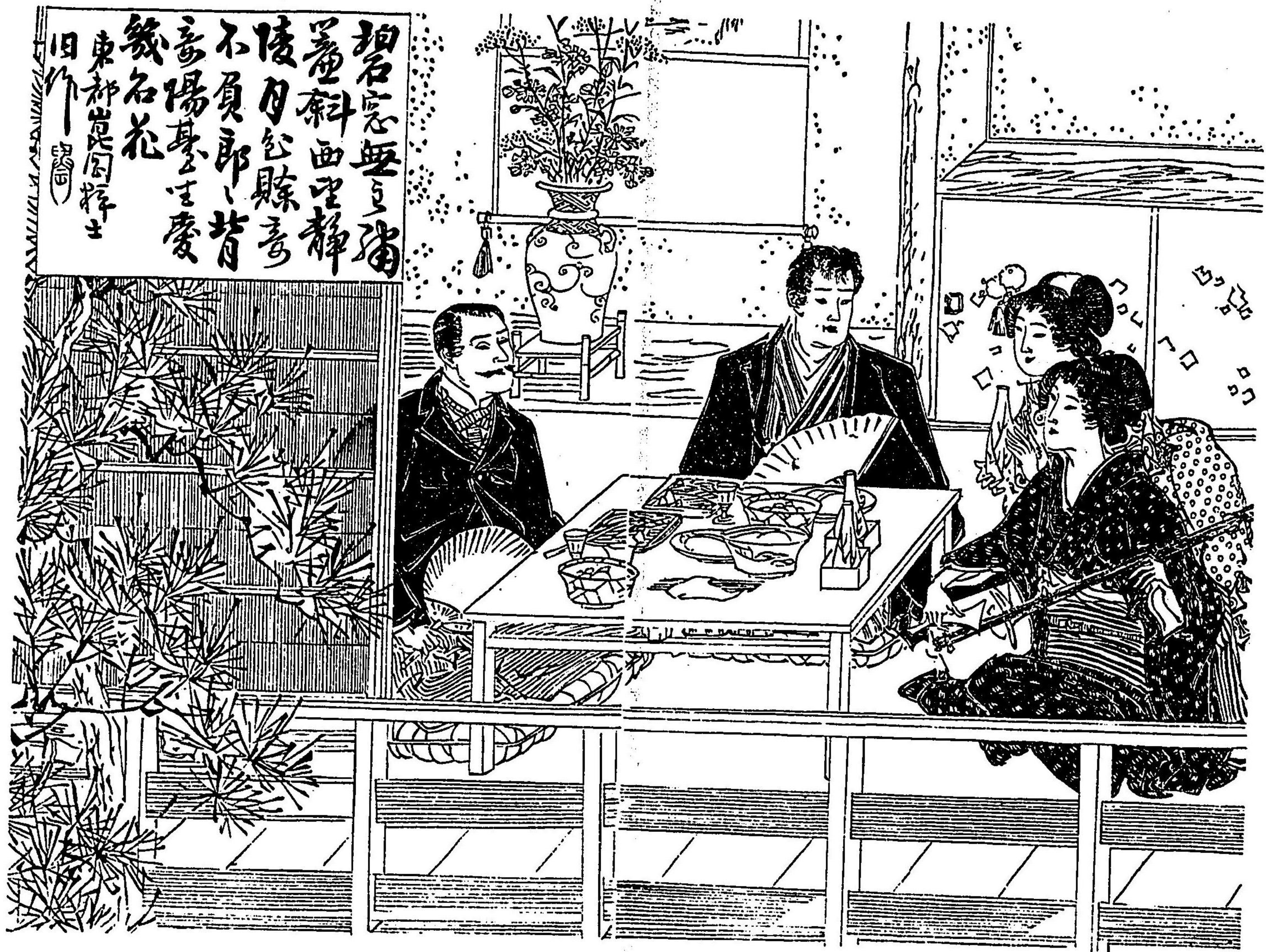
壯さらば御話承を度志。何分一々問ひ申も。いかゞあれば。唯老先生の尊慮におまかせ申べし。

と莞然として。少く膝を崩したる折柄一人の田舎漢。右に瓢を提げ。左に辨當様の物を持ち。あはたゞく駈來り。老翁に向ひ恭しく拜跪さ。

田御隠居様は爰にありり。最速おひるにも近ければ。彼所此所御探とまうして。いつもの水と焼飯を持參せ。

と話を聞て老翁は。僕に向ひ。
翁ヤそれハ御苦勞なり。不思議の縁で。此にござる旅人と。懇意になり。いつもの話好より。時間のたつも打忘れ。今迄問ひも。答も。近頃になき此翁の愉快を。心に感トたぞ。ソレ

又復現一人



碧石窓無豆粥
墨斜西望靜
不負郎背
音陽基生慶
幾名花
東都岩園梓士
旧作 (一)

借田舎漢、
 說盡花柳、
 形情而不、
 敢使老翁、
 出之口頭、
 作者苦心、
 可想、
 平叙後、忽、
 插以此流、
 麗文、是文、
 章關鍵之、
 處、

ソレ丁度汝の來りすが。もつけの幸ひ。此客人に御着がはりに。酒樓の話をして進せよ。其内老人は一息つかん。

と聞て田舎漢の得意顔して承諾なし。

田さらばおはなし申べし。先君が代に静岡の貢豊に白雪の。姿装ふ芙蓉樓。天津乙女が舞妓の。まなとりかへす愛敬を。三保の松原を。それならで。磯馴てふ名とふおもて。あの手あの手と。兩替町。隔つ街も程近き。風流の友を求めんと。一層割烹か。東京より。三層樓か。名の高き。求友亭と申なり。岸のさざれの石を名の町に老舗で千代かけら。巖に根さす。會松樓。清き泉もつぎせ。さき。酒地肉林は是。此娛樂極る仙境ならん。時。いもわ。かぬや。そ。初もの。安倍川の瀬に。む。鮎の。春は若くも。老樂の耳。あ。ら。な。く。に。不。と。い。ぎ。す。こ。い。に。聞。ね。と。初。鰹。色。も。

もか、い、死、早、苗、茄子、松、に、生、ひ、さ、る、菌、の、形、ち、に、顔、も、紅、葉、鮎、口、
 に、は、誰、も、孝、順、な、る、雪、の、筍、氷、の、鯉、山、と、川、と、の、献、立、に、墨、を、駿、
 河、の、和、田、津、海、霞、に、覆、ふ、硯、蓋、土、筆、の、ふ、で、に、春、雨、の、色、を、染、た、
 る、土、大、根、辛、味、加、減、も、程、乃、よ、き、潮、仕、立、の、吸、物、に、濱、焼、に、す、る、
 眞、砂、鯛、腕、の、蕨、の、握、る、手、も、粹、あ、芽、山、椒、憎、か、ら、ぬ、余、所、に、さ、
 み、の、あ、る、と、て、も、甘、醋、に、い、ん、で、と、口、合、も、む、ま、ひ、甘、煮、と、感、嘆、
 に、恐、入、鳥、む、つ、ま、ト、き、ち、ん、く、鴨、の、小、鍋、立、浦、山、鳴、の、茶、碗、盛、
 山、の、芋、か、ら、な、る、と、い、ふ、鰻、の、池、川、忠、に、て、扱、異、國、の、調、理、を、
 も、傳、へ、つ、た、へ、て、回、障、子、靜、に、昇、る、客、人、も、洋、服、出、立、の、當、世、風、
 此、所、の、開、化、も、三、盛、樓、あ、ぞ、と、誰、や、ら、の、中、本、口、調、で、洒、落、て、は、
 實、地、が、わ、り、ら、ぬ、と、御、小、言、頂、戴、も、感、心、せ、ね、ば、是、か、ら、眞、面、目、
 で、さ、つ、と、つ、ば、め、て、御、話、一、申、せ、ば、割、烹、店、は、そ、な、れ、求、友、亭、の、

忽而經濟。
 忽而諧謔。
 忽而學術。
 忽而諷刺。
 隨問隨答。
 奇々怪々。
 如無所。
 底止而有。
 歸着處。自。
 是小說上。
 乘。

二軒にして、東京で申さば、井生村八百松、其他も澤山あれど、
 も、餘を煩くければ、是よを更に論議を轉つ、磯馴の向角に見、
 番あり、絃妓の現今僅よ十三人計、内よ二老妓あり、長吉と云、
 の。明治初年幕臣、移住の折柄より業を此地に營みたる。一個、
 は金八といひ、昔一の老猫にて、或は人三化七なると、
 噂のあれど、座敷をとりもつ事、客をそらさぬ腕前のさあ、
 が年が功より龜の子の雛妓の及ぶ所にあらざり、割合に御、
 茶を挽ぎ、ひりざるに非るなぞ、妓の少ければなり。とでも申、
 べし。頃者の事なりし。此地の藝者に、ろくあものはないと、
 論下たるものあれども、是ハ大なる誤なり、物毎すべて平均、
 を立て考へられたし。何とならば、絃妓を聘で、玉でも花でも、
 東京の都て半額なり。今其一端を擧げる時に、揚代壹本金、

拾六錢にして、纏頭の三拾錢より多からず。拾錢より少からず。との法例の布告にあつたといふにあらねど。既に慣習法となり。法律に均しき力をもては。今更變更もせらるまじ。されば。花に五拾錢を投げるの堂々たる官吏にあらざれば。東京の粹士なり。壹圓を擲ては。是のさつたりと妓をして疑心を懐しめ。夜伽の用意をするなるべし。と辨に任せて喋々立て。手巾よて汗をふきく。少しく息をやすめけり。

翁 オイ、爺。話一序に。芝居から。廊の事を。客人におきかせ申せ。

と主翁の命令に是非なく。又も説出しぬ。

田抑芝居の。二十年前の。梅屋町にて。小屋掛興行あれり。今の

在方同様あぞ。其後追々開け行き。現今では四座あり。寺町通りに。若竹座。櫻川座の二座あり。若竹座は元小川座と稱し。當地第一との評なり。維新の際。徳川氏當地を賜ふて。御移住なされし時。東京より附来りし。淺草寺の新門といへる。千束村の方にありける。門の外に住居なし。親分とたてられる男に。辰五郎といへるものありしが。當地へ來ぞ。小川座を建設し。處。都合あぞて閉座せんと云を。當縣下清水港に住む。親分株の次郎長と云もの。當時の正業よつき。同港に末廣といへる。塩風呂。料理店を開きおるもの。本名。山本長次郎。新門に向ひて。節角開きし芝居を閉座するは。都合といへるは定て。金故ならん。金銀の世界のさきものなり。如何でもあるあらんと云しに。はけまさされ其儘打續て。小川座にてありし。又

若竹座と改座なぞたる。此頃の事あり。時座の研屋町にて。元の静座と云。安西裏町。松川座あぞ。里谷穴芝居と号す。最も下等の趣あぞ。是の前年紺屋町に在りし時。巴座と稱せしとか。都て是等の四座に買れて来る俳優。田舎廻りの者多く。たまたに東京よぞ來演すれとも。直段の大槪三錢より拾錢にて。棧敷ウツラ共。一と間五拾錢位。舞臺に準じ甚狹隘四人ぐやつとあり。辨當類。平均壹人前三錢宛位。茶屋の一二軒あぞ。若衆へ拾錢も投ぜられ。驚愕して。シヤツクリを留る位なり。乍然多く。おとまりさんの仕事にて。所のもの。辨當持参あり。まゝ寄席の澤山あれども。七間町。開情亭。富士松。吳服町。富貴寄。是等の上席の部なり。席料は壹錢よぞ。三錢よぞ。まゝなるも。東京の落語家の類來りし時にて。其他は何れ

の寄席もウカレ節として東京にて。デロレンとして。極下等のものあぞ。當地も田舎の風を免れ。最此席への來客多し。毎度猥褻をもつて喝采を得るも。折々其筋より叱責せらるゝ事あり。淫風凜然として。臭氣多きを見るへきなぞ。とあまたへ指さし。また遊廓の談に及ひける。田アレ〜御客人。あの電信柱がある。新通りといへる町。乃はづれに。松並木あらん。あの手前壹町斗左側に。安倍川町。字二町まち。すこし昔。柳町と呼へる。遊廓にて。東海中隨一の場所とい。少志誇張に過ぎたれど。先其縁起より説出さば。恐多くも東照公の駿府へ居城せられし後。慶長年間伏見の遊廓を此に移したりしが。元和にいさ。其半を江戸に移す。廓中すべて七町ありしを。江戸より原へ五町。残り二町を其

紀念として鐵張の門扉壹枚を。江戸に贈り。壹枚を此地に存せり。されば芳原の本店をまじ。俗間に傳はりて。耳に聞けども。目にいまた其扉の形に視されり。證券印紙をはつて。此俗傳り。受合の仕らす。唯寛保年中の駿府町奉行たを志。筒井内藏どのとかやす。頑固爺り。遊女の廓外に。出遊してのからぬの。又駕にて出入し。拔道してのならぬのと。裏通りの通行を禁止せり。其後。元祿の頃の町奉行。水野小左衛門どのと。まじ通行をやりまじくいひととり。されり。矢張裏通りの通行ありむなるべし。其頃の遊女屋の。中の町に。江戸屋。兵庫屋。小松屋。鍵屋。伏見屋。大松屋。桐屋。三島屋。若松屋。三保屋。上ノ町は。江戸屋。丁字屋。信濃屋。二軒の大和屋。合計十五軒。揚屋は。大黒屋。惠比壽屋。萬字屋。の三軒。茶屋の。相摸屋。井筒屋。松田屋。



Bin-dzume no naosi
iya mei mo tsudewi
moji
Cokko.

上總屋の四軒にして是の皆雪花菜町にあり。遊女の員數は。貳百四拾人。玉代の。壹分。九百文。百文の高下あり。時間は。明ヶ六時より。夜四時迄との事。茶屋の事は酒屋と稱へ。主人の事を酒屋のいせき。女房をかんはあなさいひー事なれども。歳移り星變り。今では大に其體面も違ひ。先づ入口の大門の。扉重門にして。隸書を以て左右の柱に富岳烟霞眞是富双街花柳本無双との一聯を刻せし。往年當地に奉職せられし。某粹士の作られしとか。書れしとか。聞けども。今はむかしの變り。故か。全く彼乃出店の。芳原の大門に。櫻痴粹史の題句に擬せし。事ならんか。或は是を讀みたま。如何なる意味なるや。抑も對句あるか。分らざと。矢鱈に批評を下せしは。定て不粹のやきもちならんと思はる。そこで廓内の妓樓は。小松樓。

項日改五
拾錢爲六
拾錢云、

蓬萊樓。喜報樓。等十軒。引手茶屋。安田屋。美濃屋。等十五軒
など。猶も委しく知らんと欲せば。自身は行て。一夜散財すれ
ばよからん。所で上等娼妓の揚代は。五拾錢。茶屋よ登れば
六錢の手數料。酒の壹本六錢。三ツ物は。貳拾錢。御手輕なれ
ば。茶屋から遊ひても。金八拾錢にて。御取扱ひ申べいと廣告
のちらしを出したれども。まんざら夫でも。行かれま。中等
娼妓。三拾錢。四拾錢。下等。貳拾五錢。拾錢なれども。是は即
ち。長屋として。局見世なり。飲食物は。上中下おこなへ同トとか。
近來。蓬萊樓に。洋裝娼妓の顯れて。名を「スフリング」カイン
ド「あづと命」一時は一夜に。何十人のまそいあそと。評判あ
れども。スフリングとして。春情を惹起す丈けの。花顔柳腰にも
あらざるべく。カインドとして。かいん所へ。手がとゞく程の。親

廓中絃妓、
分爲三等、
十六錢爲
上、十二錢
爲中、八錢
爲下、謂之
半玉、

切もあらざる乎。大に昨今すたれくちとは。守舊黨の悪口あ
らんか。絃妓は玉代。拾二錢五厘。纏頭は。町藝者に同ト。其現
數の二十二人。音吉。小勝の老妓あそ。幫間。僅に。平喜。平内。
の二人而已。廓内の廣袤も。昔と少しも異らねど。其狹隘なる。
猫の額の如く。ぐるりと廻ておこまいなり。また廓例に後會
馴染のといふ事なけれ。別に世話なくして。其晩よ親類
突合にて。一度でも。十度買ても。おもいろみに。かはる事なけ
れば。當地の通人。粹客の。彼所へ一泊。此所へ一泊。あの妓。あ
の妓と。好み次第など。されば。一廓を構へたりとも。自然宿場
と同様に。旅の恥。かき捨との通り一篇の者多き。による
もの歟。まづ廓中の沿革は。こんあものにて。別段御土産にも
なるべき事も。あらざるべし。

壯成程委敷御存トの事。恐入たる次第あり。ついで今一ツ
伺度は。淫賣なごの此地に少きや。兼て法律書を繕きし時。西
洋あごにては。寒國暖國により。姦淫の律を異にし。暖國の者
は。色氣付く事早く。寒國の者の晩しと説けり。當地は名代の
暖國なれば。随分淫風は。盛ある乎と思考せり。
田わしあごは。法律の西洋のと。そんな事は知らざれども。何
所も田舎は同ト様なもの。當地は随分早きようなり。また
隠賣とかは。開けぬ昔は。ことごとく知らぬ事にて。老人に聞
傳へしは。今話せし二丁町の遊廊のちきそべに。彌勒町と云
町あり。その茶屋に賣女あり。直段は相對にて。百文以上。また
八幡町には。賣比丘尼あり。最もこれは。常々富士の根方に。出
稼し。留袖振袖共。後帯にし。直段は三百文。正月七日は。親の許

に。歸り。そよらで野合も少あからせ。との話に聞し悪風の。自
然に今よものこりあり。先現時の形況を説かば。夏は氷店。冬
は汁粉。牛肉。鱸。鳥鍋。あご。見世の形は變れども。かはらぬも
のは。暖昧屋。樓の戸棚に坐敷あり。座敷の裏に拔道ありと。其
道に委しき若もの。に。き。又こゝでは地獄といはせし
て「シバ」と符牒あるは。もと人力車夫の。云隠語より出で。則貳
拾錢にて。乗るとの事なるよし。かく悪口を近來言出たり。
去ながら是等の店へ。ふいと出の他郷人も。たとへ東京子で
も。直に話は付す。ことば言葉も。この訛りにて。通ト難きあ
とあり。猶洋行學士が。香港や。桑港に。上陸し「カチヒイウス」
の「ボーイ」と對話するごとく。其土地々々の土語ありて。一寸
解せぬとあるべし。今戯に申さんよ。能聞給ひ。

女モシ、旦那一寸

四十六

「オコラレタ。ヨウダニ」女「フンヨ。カンニンシテ。オクローヨ。オト
マシイ」旦那「ニキヤイへ。オワガンナ。ヒヤア」客「や、
私は「ツイデニ」二丁町へ「オナヨコ」を買ひに「ユカズ」女「や、ウ
ツサキヒヤツタ。ヤツキリ」て「ユキガワルイ」そんなあとは
「オヨウエレ」客「それでも」アノシウガ。バング」に顔を見せぬと
「ナンブリカイテ」あまるに「ヤア」ソウキヤア」そんなにいふ
と私は「ドウツクニ」客「エレ」オトマシイ「コンダ」時に汁
粉でも「サンダス」がいひ女「ガライ」忘れやした「カンニンシ
テオクウヨウ」客「アイ」ユノイト」にはいつている餅「シ
ルイ」あすこの「コスイ」子供に「ヤラズ」あれくもう「メツタ
イ」て「エー」子トヤ

田舎漢一
話、讀者
亦捧腹絶
倒、

と身振手眞似して。話上手の面白ければ。旅人の一段興
にいら。抱腹絶倒して。暫時何とも不言有けり。時に彼の男
日脚を見て。驚きたるさまにて。

田オ、是の大變はなりに身がいら。大事の用を忘れてのけ
り。御客人。眞面目の話は尙。老師にゆるりと御聞あれ。
といそ〜して。元來道を下りぬき。旅人の謝辭も耳に
もかけぎ。いつしか影さへ見えざりけり。旅人はやがて
容をあらため。老翁にむかひ。

壯誠に種々の御話を承り。何共萬謝にたえぎ。猶も伺度事ハ
山々あれど。最早午時も過たれば。一旦御別れ申たる上。御尊
宅へ。伺候いたすべし。
翁「イヤ〜翁ハ。今日此處に遊べど。明日は何方へ參る事ヤ

四十七

自分にも更に分らざり又家屋も別に有にもあらねば。また
遇ふ事も難からめ。されば後日の約速は出来難し。

と聞て旅人の慨然として。獨心に思ふ様。今茲にわかれた
る上。復の逢瀬に分らぬと。あれ。今一層老翁に。示教を
受んり。いやくそふ。老体を勞するも心なし。如何せん
と躊躇したりける時。老翁申ける。

猶色々貴殿に。話し置たき事もあれ。今日の日終此山上
にて。話おくらさんか。貴殿は外に用事ありや。

と問はれて旅人の。大きによろこび。笑ひけに答る様。

主要の有無は兎も角も。老先生の仰の。素よ拙生の願ふ所。
いかで固辭申さんや。

と少一膝をバ進めつゝ。端然として居なをぞより。老人脇

にありける。辨當包みを見出し。手づから開きて。
翁定て貴殿も空腹ならん。是を二人して食すべし。

と大にやかなる。握り飯をさし出せば。辭するによりあく。
双の手におしいたゞき。

壯實に今日は何から何まで。御心注ぐたされ。恐入御厚禮の
辭に尽し得ず。御遠慮申さず。頂戴致さん。

と一喫すれば梅干二ツ中において。塩味を添へ。其味ひも
異なりて。僅に一つのむすび飯にて。頗る満腹を覺へたり。
老人の飲たり。瓢の水をも。分ちあたへたれば。是を由ま
たいふがまに。受飲みたるに。速心地爽快ある如く。彌
心よかぞけむ。烟草を嗜む癖あれば。再三老翁に謝しての
ち。「マツチ」を出し。「シガレット」を一吸したり。

非常人也、
非常食也、
西王母桃
之類歟、

開鏡

壯唯今頂戴の御飯并梅干の。別段美味の様に覺へり。矢張此土地近在の産出にや。

大正十三年
西曆一九二四年
非常貧乏
非常人地

翁さればあぞ。米は却而東京近在のものより、味あるように常々思へり。また梅の實は、暖國なるゆへにや。隨分澤山産出せど、既に遠州地方の南海邊に、生出するものは、大概小田原商人の手にくれり。梅干の小田原の名物あれど、其實本家本元の遠州あぞと聞及べり。此他鯉節杯も土州より買込に來て持行て。自國の産とあすよしも聞り。壯世の中に何事も是に類似するものあり。米國商人が麥稈帽子を歐洲地方へ賣込む。莫大の事なれども、其實麥稈の清國の天津、芝罘よき仕入るなぞ。唯に此事のみあらぬ盛に商業貿易を營んに。如斯にあらざれば、ならぬように存

下られたぞ。自國の産出を。他邦の利益にされるは。未開地方の。あはくこれあり。誠に遺憾の事共あぞ。

翁成程老人も始て聞話、さすがの世評の如く。米人の世界の商權を握ると稱すと雖も、溢美ならざるあぞ。壯甚いやしき事ながら、此米あとの相場、平均何程あらん。

此二三年來の大畧、先四斗俵にて、壹圓五六拾錢の間を昇降せり。されば玄白の別なく、到底東京よりの安價の様に思へり。乍去、爰に一ツ惡弊あり、米屋而已と云にはあらざれ共。たとへり某屋の某家の出入となる。始に升目もよく、米質もよけれど、二月、三月と。なると、東京との違ひ。終には段々米もあしく、升目もかくなるなり。是故に土地慣れたる買人は、月拾圓の米を買んに。西隣にて五圓。東方にて五圓と。

分買をせむ。されは米屋にて互に競争の氣味にて。幾分骨を折りてよろしと歎。老人などは誠に面倒なれば。別の方も設けねど。先年幕臣移住後以來。當地へ奉職赴任せらるる人を指て「ナトマリサン」と稱し。今日此所に居ても。又翌日何方へ行や知れずとて。此稱號もあるあらんり。最も前の悪法を行へど。誠に一洗すべき事あれども。人心の改良はど。むづろしき事なれば。仕方あり。

と頗る歎息して。語をける。旅人も首を傾け。腕を組み。壯是も實の人の進ぬに。源因して。今から矯正するも。難るべけれども。其内民間の進歩は。必し消滅の期至るべし。去ながら大體當地の人情は。如何なるものによ。素より人の内部に立入る。宜しうらざる事なれども。御承知もあらば。

駿産而讀
此一段、不
發憤者、非
人也、

一端を承りたり。

翁されは是に始と老人も。如何申て可なる乎。存せねど。今日の所は知らず。なれども往時安永の頃。江戸飛脚問屋にて。駿河屋八太夫と申者。度々江戸駿府の間を。往來し能く。人情を知りたりとの。話の大畧は。人の心は取入あく。我意に募て。うと駿河の文字の如く。河水の小石を流し。止る所を失ひ。實意少く。跡を搦はぬといふ様あり。また町人は。蹴鞠。揚弓。茶湯。俳諧。淨留理。小唄。音曲。圍碁。將棋。双六。等の。遊藝を玩び。吝にして偽をかざり。矯奢にして。恥を知らず。我而已宜しく。慢。人を助る事なく。最もそねむ心甚し。と聞けども。これは。八太夫が。人情あしき點のみを擧げて申たるまでにて。一概に斯ばかりとい。保証の出來ざれども。復さるるまで此

今猶存矣

所謂卑屈
心

樊が。無とも申されず。老人も直に是を一刀兩断に立割とけ
 に行かざれば。猶貴殿の心中にて裁決せられさし。
 壯イヤ夫等の氣質の獨。此地而已にあらざ。あれども。町人杯
 の遊藝を喜ぶ事。今も間々ありと傳へ聞り。到底進取の氣象
 に薄く。樂に衣食すればよむとの。東洋人種の。一分子なるべ
 い。
 翁 左様々々。萬事優長にして物事はりごらむ。既に前の八太
 夫の時の古記に。
 都て此處の風にて。誂細工日限り申付候而も。早速出来る事
 なを別而七月盆の内は。何様なる利徳有之とも。細工不仕。且
 前金渡ひ得り。猶以細工遅く出来るあり云々
 右の文言ある。今に胸裏に記憶を居れり。されば日本人種

此語無
限感慨、讀者
求之言外、
而可、

の。目前の小利に走り。他日の信用を得るを知らざるもの多
 じ。なご世論百出すれども。かほぞ優柔不斷にも。あらざる
 べーまた「ノンキ」にも。あらざるべー。
 と少く激論に渡りければ。自然民間の毀譽褒貶に移る
 を憂ひ。老人がひもあふと。ふひと氣がつき。故に冷笑し。
 翁 マア人情のこんあものさ。
 の一語を以て。結びたれば。旅人もそおに如才なく。更に語
 を轉し。
 壯 時に信用といへば。當縣の名産にして。最も外國に向ひ。輸
 出するもの。青茶。漆器。竹細工。椎茸。なれども。近來の形況
 の如何や。
 翁 されば此事あぞ。老人も隠然老婆心を起す。彼是田作の齒

ぎしをなせし事あり。夫は貴殿など知らざるべけれど。輸出する物品中には。合茶の天日のとまか物ありしより。一時の大に信用を失せし事あり。合茶とは縦令バ。静岡製の茶へ。他所製の安茶を。混合し箱へ詰めるものなり。天日との葉茶を蒸し。足にて踏み大陽にて中乾きの折りを以て。いろいろなかけて。仕上をするものなり。是の手數もかゝらば、炭薪もいらぬうへ。正製の茶と。外面の變らば買人の正製の茶と同様なれども。買ひたる跡にて分れば。遂に一二人の狡計より。我日本の。不利益を招くに至り。心あるものは。常に是に付。百慮千思し。政府よども度々諭告を出されたる。然れば明治十七年三月よ。茶業組合の規約準則を布達せられ。茶業の熱心家のよく。奮進し愈益擴張する事あらんとて。中に

器械既成、
直輸會社
既建、老人
夫少安心、

も製茶器械を。發明せし人あり。なごの風評をも聞き。老人も少しく心を安し。然ながら尙。静岡以東の。村落中には。天日製のものありとか。何分縁なき衆生の度。難しとやら。慨嘆に堪へざる事も少からず。なごともあれ。あれ見られよ。安倍川橋よ。西岸に添ひ。五六町こなたに。南北一條の通を安西町通と云ひ。二三の「フラフ」あるは。即ち茶業組合の。尾崎商會。井海野大石等なり。其他數ふる。違あらば。先このところは茶商の。巢窟と稱しても可なり。されば其東方の街を。茶町と呼べり。其盛なる一端を見るべし。
壯縣下にて一番多量に。茶の生る所の。何れの郡あるや。翁矢張安倍郡が。第一の収獲なるべし。其他の遠州の。榛原郡。ならん。今其見積高を比較すれり。安倍の製茶高凡。九万五六

千貫目。生葉にて一反歩。三十二貫。榛原郡の。安倍に比すれ
の。製茶高三千餘貫。生葉一二三貫も少額なり。

壯茶業組合取締所は何れの地あるや。

翁札の辻町。即ち縣廳の傍あぞ。蠶糸業組合取締所と。同所也。
壯頭取の誰あるや。

翁茶業の丸尾文六氏。蠶糸の樽林宇太郎氏にして。兩ながら
縣下一般の。組合を摠括するなぞ。

壯蠶糸業は當地が矢張第一なるや。

翁左にあらざ。其上等品。并多量に産出するの。静岡以東の諸
郡なり。養蠶家の。有渡安倍兩郡にて。僅に四百七八十戸なり。

壯漆器并椎茸三叉なぞの。組合はあぞや。

翁漆器組合はあれども。其他はあ。最も漆器の方の。自ら茶

業等に異々。各自協同として。規則を設け。取締所は。平屋町にあ
り。頭取の佐藤吉右衛門氏あり。
壯他郡にも此業ありや。

翁漆器。寄木細工。竹細工。の全く静岡専有の物にて。他郡に
は更になき様なり。漆器類の輸出物の一なれ共。是も近頃。英
國にて信用を失ひ去話あぞ。横濱にて黒漆蒔繪の手箱を買
ひ求。二十餘日を経て。自國へ歸り。日本の土産に爲さんと。荷
を明て見れ。この如何に。買求めし時は。金摸様なぞに。い
つか赤金に變りたりとか。是も矢張蒔繪の粗悪なるものあ
れあり。此業を營むもの。亦少しく心を注められた。さて
また漆器にて。思ひ出せし事あり。西洋人の日本は。漆器の名
物なれ。「ジャツパン」と呼ぶとの。彼地理書等にも見へたれ

ども。或者の説に「ジャツパン」の日本の字音なり。西洋人が日本を發見せしは。直に此より來りしにあらざり。清國廣東より聞き傳へしに。違ひなきされし廣東音にては日本を「ジャツパン」と讀りし。洋人が日本へ渡來せし時に「ジャツパン」即ち漆器細工の上手ありしを見て遂に「ジャツパン」と稱せりと聞り。貴殿など。今世の學士。此説の如何のものにや。壯成程これに始て伺ひたれども。左もあるべきと思ふ事あり。當時盛に流行する。「バアレー」の萬國史に載る。支那の歴史にある。國名。人名。等。南北兩音の混同あれども。多くの廣東の土音あり。

翁これは又耳あたらしき話なり。老人も二十年前。蘭書を讀み得たるより少く。英書も讀みし事あれし。綴字位を今に

知得しおれば。昔にかへり言の序に質問したる

壯イヤ夫は恐入たる事なれども。是も一時の餘興にもあるべけれし。先大畧を御話申べし。乍然素々淺學の拙生也へ。誤謬の廉も多からん。あれど其所は御許ありたり。扱萬國史支那の部に。Fohiは即ち伏羲にて。清音にて。フー。イ。イ。Chausは。周にしてチャウ。sは。附音と知るべし。Chingは秦にして。サイン。gも。亦附音あり。Vauは。漢の武帝にて。ブエ。ナイ。Sigenは。唐の高祖。Chwanglongは。宋の高宗。Genghisは。元の世祖。Chingisaは。明の神宗。Yongchingは。清乃仁宗の諱にて。永琰あり。Confuciusは。即ち孔夫子にて。sの字。前に同ト。最も此内。音の異同少からざれども。或は記載せし。事實に就て見るべきものあり。且前説の通り。廣東。香港。上海。と各々音に

異なるものあれり。猶博雅の君子に問れたる。又日本讀にて。誤あるものあり。Europeは支那にて。歐羅巴と字を辨め。ちらにても。ユウロウアなり。然るに我邦にては。歐の字をヨウと讀ませり。是も誤の様に覺へる。されは華盛頓。紐約等の類。能く注意ありたき事なり。餘り是等の事を。陳述すぎると學術に涉る。肝要の事を外にして。却て拙生の意はあらざれり。他日また緩々ゆ話や事もあらんり。

翁左様と。老人も猶聞き度も思へども。貴殿の本意も非ざるべけれり。元の殖産の話に戻るへり。どが誠に老人の身にとぞ。本日談話中の。一大益話なき。當地子弟の洋學を脩るもの。轉語はおくべし。賤僧や夫まで。恐縮の至りなき。全く一己の管見に過ぎられ

論、目下

一篇經濟
急務策、

急務策、
論、目下
一篇經濟

は。御参考の一端まで。相成は幸福なき。時に今伺ひ一國産中にては。天下に有名ある事あり。製茶り第一なるべし。翁老人兼てより。静岡縣の貧富。製茶師の善惡に在りと。謂へり乍去。猶後來開進に隨ひなは。漆器椎茸三極海産物も。大に國の益になるべし。既し御存もあらんが。椎茸は清國に輸入し。甚高價あり。最も大形の物をは賣に悪く。土地は稱する。木は。椎たけあるものを。最上とせり。然ありら是も。限りあるものなれば。茶の如く十分の輸出も。出來さるべし。唯方法の善良よりては。茶に亞くものは。海産物あらん。縣下東面一帶の海を。控へおれば。隨分漁獵も澤山にして。既し遠州地方には。先年來あこびあこびを捕り。干あけて輸出を謀む。と聞けども。到底縣下一般の海産壹年の収獲は。五六十万圓

天下多此類。留心時事者。須熟讀玩味。

痛快

に過ぎざれば。猶一步を進め。鯨の類を捕獲せしならば。其利益を百萬圓にも及ぶ。あらんか。誰あつて此に。着目せざるを惜むべし。若又縣下の有識者にして。可爲を知りて。あさゝる。とき。必ず他縣人が。外國人の捕獲する所とあり。國益を。滄溟の中に投棄おく。に。同トかるべし。又世の經濟學者は。貿易上につき。自由貿易。保護貿易の利害得失を論ぜれども。自由保護は暫くおき。當縣なぐについてみれ。第一に海外直輸出さへ六ツケ敷。毎々横濱。姦商の手を経るもの多きは。實に遺憾千萬にして。みすく巨利を他人に占得せらるゝあり。是と云も。國と國とに對して云へば。優勝劣敗。事物について。謂へば。富儲貧失の外なら。既に陸産第一の三極の如きは。本縣と山梨縣との專有物ともいふべきに。いづも資力家



うらちまふ
よあま
あまら
おまら
あまら
あまら
あまら



行南
福
田

制資力家。
不_レ如衆庶
團結也。

の左右する所となりて。相場の高低は其手にあぞ。未だ十分の專有權を維持する方法なきは。所謂勢なるものにて。致方なき次第なり。去_レ迎_レ勢を制する。英傑あぞて世に出ても。復た憂る事もあらざるべし。

と頗る杞憂の顔もちなぞし。頓て眉を開きけるに。旅人もまた。怒れる肩をくつろぎて。

壯海産と承り思ひ出せし。當地有名の。興津鯛とかい。昔より幕府へ献上物の。一ツありしと聞すが。果して然るや。

翁是も東照公。此地へ御隠居後より始りし事にて。興津鯛との後世の謬傳にて。其實昔者一人の貞女あぞ。其名をおきつと呼べど。年若くして寡婦となりしも。能く貞操を守り濱邊に上る甘鯛をさして。一塩にして乾物とあり。賣り始めたる

を。東照公も其味ひと。その志を稱され。おきつの鯛と申され
 くなり。傳へたり。されば興津宿にて。捕るとか。おきつ宿で。
 製るより。興津鯛と云に非ざるあり。まゝある説に。東照公の
 駿府に在られしとき。興津河内守といへる人より。度々献上
 せしを以て。名を賜ふともいふ。ごちらが實事なるや。いづれ
 も口碑なれば。是あるをあらせ。
 壯是もまたひとつの逸事よして。我々共の夢にたも。知らざ
 る所なり。此外に名産の魚類も。猶あるべく。何地よ。輻輳し
 來るや。

翁輻輳する魚類は。東京に異ある事あり。唯其多数を占むる
 もの。第一鰹。鱒。白須。さわら。黒鯛。太刀魚。沖鯧。ウヅワ。グ
 ナ。杯の類是あり。其内ハンペン。蒲鉾の美味。東京和田平に

も劣らざるものなき。此等の魚。大概ひ東へ清水港。西へ城
 の越より。朝あ。夕な。に持込なりされども。魚が捕れるとい
 へば。豆腐や芋よ。も。安價なれども無き時は。鰯一疋も。静岡
 中にあらざる程なり。

馬琴口吻

將結上篇、
 暗出三世
 二字、一等
 不苟下、

時しも旅人は空打仰ぎ。遙に聞ゆる鐘の音は。祇園精舎に
 あらねども。諸行無常と身にうむ。戀にあらでこの圓
 座立まくを。夕日影。塙へ。へる鳥の音に。暮際いそぐ
 山霧の立も。あめたる胸の内。心ひとつ。葉して。二度と得
 難き奇遇を。三世に渉る伏線に。四方山積る語り草。五畿
 にもまさる此名どころ。富士の高嶺の六ツの花むつと
 數へし時のかぎ。是非あく老翁を催して。
 壯ハヤ太陽も傾きて。今聞鐘も六時あらん。御物語の面白さ

に。時の過るも知らざりし。老師も最早お歸あらん。

不遊す、
二、三、
細田三州
獄詰土

と言ながらフト。安倍川向の山を見るに。連山の間其形。富士山の如きあれば。頗る不審の顔色にて。老翁に向ひ指さし。

壯あれ彼の山は。何れの地あるや。

翁ア、あれは即ち。安部の小不二と稱する山なり。誰やらの作にや。安倍川に。魚を捕るとき。の詩として。老人に示せしが。

雨霽村々四望閑。手携笊箆指江灣。東方已白西方未。

山 残月猶懸小富山。

とか覺たり。曉と暮との變れども。其實景情况进行を想見するに足るべし。あの山の近邊よを先を。安倍奥と稱し。人物更に開けき。おのづから別天地の如くなり。老人も今迄追々。見聞せ

温翠口湖

「事もあれども。又言の序に御話申べし。

旅人は更に首を彼所此所と回し。ふと淺間山の裏を見れば。自一搆の家屋あれば。

壯アレあの一搆へは。監獄署にもあらんや。

翁もとよぞ然り。あの地を井の宮と云へり。

壯囚徒は現今幾何ありや。

翁大凡五六百人に過ぎと聞り。全く是警察の行届くと。民間の景氣のよきによるとか。其證據は。二三年前に比すれば。犯罪人の減少せし。千人餘なぞ。最も土地の匪徒。左程重罪の者もあらざ。又強竊盜共に。通掛りの旅稼き多しと。話せし人あぞ。左もあるべし。署中に夫々の就職場あり。其内重かるもの。笠編み。藁細工。製紙。等あり。濱松。掛川。沼津。下田。と

是時未有、
出獄人保
護會之事、
老人而有
之、
レ知必喜説

合て四ヶ所の分署あり。近來署中に改良を加へたるよき。當地の新聞なごにも。大に論贊せし事ありし。壯新聞と申せば、世の耳目と稱する。新聞社の沿革も。序ながら承り置し。

大務社罹
災自江川
町、移吳服
町、攪眠社

翁さればなり。當地は新聞の始は。明治六年二月に於て静岡新聞と稱し。提醒社と曰ひ。江川町にあぞ。以後紙面の改良体裁を變換。發行停刊等の事あるも。社員の勉強を以て。十六年迄引續きたり。十七年二月に至り。遠州地方有志者の創立に係り。大務新報なるものと。合併して。静岡大務新聞と改題せり。是よき先き。函右日報あり。十二年六月に。開業し。十八年三月廢刊なりたり。又自由民權説を主張し。一時世評を博せし。東海曉鐘新報。十四年十月より發刊し。二十年三月更

亦起、是近
日之沿革、

に東海繪入新聞と改題せしも。何分其資力に乏しきによりてり。遂に大務新聞社の内に。東海社を設け。其株を譲り渡せり。されば静岡新聞の權は。一に大務社に歸すと謂よ。外はあらざるべし。猶其利害得失。井文章論説の美惡。功拙は自ら購讀者の眼中に現出すれば。老人如き世捨人の。喙を容る所にあらざれば。貴殿も旅舎に歸を。一葉を購讀せよなら。分明あらん。

可以快人
意可以起
人心

壯世の惡口者の話に。古來より駿河地方には。是といふ人物あらざ。今川義元。由井松雪位あぞと。頗る刻論のようあれども。若し此言を聞き。感慨を起し。奮發興起して。文壇にも。武壇にも。商場にも。會社にも。大旗を翻し。東海道上に推立て。天下向ふ所。敵あはしと致したきものありと。聞けど。是素か

他邦に在て。能く地方人物を。知らざる者の言にて。取に足らぬ。どの存せられども。果して如何のものにや。

翁イヤ夫は老人も氣が付かざりしが。成程此地方にて。功名ありて。天下に聞へる人は。古よ至今に至るまで。寄留人多く。純然とへぬきのものなき様なり。乍去開けぬ昔は。兎まれ。角まれ。現在の處にて。静岡市中たけにても。學士。商人。農民。の間に其人あり。されば老人の友朋に。無二。といへる人。あの頃其表を作れり。多く民間の名士を。二人宛集めたり。これ其草稿にして。老人に校閲を依頼せあり。

と懷中より取出したる一葉を。旅人に渡す。受取て一寸披見するに。金満家に。野崎。小林。興業家に。笹間。宮崎。醫家には。柏原。大川。義俠家に。杉本。安田。其他學士代言人。米屋。

酒屋。菓子屋に至るまで。綱羅して遺す所なければ。旅人は閱し尽せば日の暮るゝならん。尽さざらんも亦残念にて。心大に困却したる様子を見て。

翁貴下定て其表をほしからんか。近々上木するとかの事なれば。自然御目にも觸るなるべし。

壯成程此表は兎も角も。近來世人の喋々する。中央集權。地方集權の論あれども。到底地方集權の利あるにしかざれば。何卒此表中に現はるゝ。諸英士に。早く議場に。面談しよくおもへ。

翁旅人が左様思ふも。最なれども。時世時節といへる事あり。まゝ政府も。地方制度について。其内變換もあるといへば。其時おその。貴下の負擔。老人あとの。關係にあらざ。なには

今夏市區
町村制度
發布矣、
老人莫復
說焉、

將相別、又吐數語、戒壯士、至矣、盡矣、

婉雅悽愴

七十四
さておき吳々も徒に虚敖に走ぞ。空論に拘する事勿れ。彼是又政事談に。なり々、をたれば。ひと先老人は。此に別れなん。復と逢時の何の世か。分らぬ事であるあれと。御縁もあらは再會せん。去あがら。是よ先の道すがら。到るる國の事々物物に注目し。人情風俗を洞察し。他年時得て。國家有用の人となをなほ。我が長日の雜談も。又幾分の益あるべし。生者必滅。會者常離。逢か別れの始めなれば。一時の離情に氣をおとし。前途の事業を怠りあべ。老翁が婆心にもあらざ。また貴下の志にもあらざるべし。何につけても身は大切。水土の異りに感觸して。濕氣病痾に罹らぬ様に。頼むぞよ。是も貴下の爲にもあらざ。天下を思ふ婆心なり。
と懇々説諭せられしかば。旅人は首をうあたれて。おぼし。

涙にくれたれども。自ら心を取直し。老翁にむりひ。
壯段々の御懇話。父師兄弟も及びなき。御親切實に。心肝に徹し難有く。何の世にかは此御恩惠を。忘れん哉。乍去。若し東海鯁生我等如き。愚鈍の者も一旦志を得て。功を東洋に建るに非ざれば。必き名を。海外に輝し。其時こそは木の根。草の葉を分ちても。尊居を探し求め。改て拜顔し。御奉酬の萬分一をも可致。嗚々と泣くは婦人に近し。復流涕はせざるなき。
と兩手を土につき叩頭して。更に辭もなかりける。然るに老人静々と立上り。裳の埃り打拂ひ。旅人を見やり。笑しけり。
翁左様。御丁寧なる挨拶に。及はぬ事。是も何かの因縁奇遇。サラバお別れ申べし。

寫得老人
之懇情、最
極其妙、

叙用武器
名稱并軍
語、自知老
人元爲武
門之人、措
辭之妙、使
人再三誦
讀不倦、

と一足三足おもみろ。跡を見かへり旅人に向ひ。
翁貴下は何方より此嶺に登られしを、聞さるゝが。是よ山
の中腹に。山宮と云へる社あり。其前の石段を下り。社門を出
れり。即ち宮ヶ崎なるぞ

と。さらはと斯を手束弓。彌敢心も寄る年波に。負たま
るありととも。曲れる腰を矯めもつ。引も直さむ押手に
ぎ握り太なる杖突試み。弓手に取て、馬手さし伸べ。持もそ
へたる水筒の瓢の中のみづをらぬ。人にも尽す劍太刀。誠
をこめし武士の朽せぬ老のむかひ。今見るはかりなる世
語を。賤の環くり返し。田子の浦邊に生ふといふ。よあし
草の品定め。残るくまなき。教草迷ひの雲は晴るゝとも。山
は遙に晚烟て。一抹ながら。いや高き。不二もほのかに斜

陽さす。残る暑も消て行。岩せく水の音するは。麓に白き安
倍川の流れの末の回り來て。またの逢瀬はありを海へ。お
つれは。同ト天地に。多かる人の中に。また。人といわれん人
かなき。我身思へ。あぢきなく。絶ぬ名残に。足つまたてい。
この足曳の山道の。九十九折さへ踏馴て。梢をつとふま
らの如く。とや行過て。遠ざかり。双眼鏡はありととも。誰が
や。彼の夕まぐれ。呼べ。聞へぬ道遙に。こたゆるものか。
研のみ。あはれを添て。鳴立。蜩の聲吹おくる。峯の松風颯
颯と。見るく。見へむなりにけり。旅人は尙茫然と打見や
り。稍て心をと直し。行李をか、けて教のこどく。山を下
れは山影に。一つ乃古をたる宮殿あり。是ぞ彼の山宮なら
んと。拍拜しやがて其下段に。腰打掛。あたり見廻し。獨語

遙應首段、
文格齊整、

七十八
壯今日の計らぎ奇人に出逢先静岡の市街風俗の。大要を聞
得たる事。我が遊歴の幸先より。又己が志を輔る。大幸福の此
上なき。

と心の中に喜びつゝ。前途を思ひめぐらなから。例の「シ
カレット」を口にくゞへ。袂よりマツチを出し摺付て。煙を
弄するはどに。日はいつゝに暮果て。霄閣といひ木下蔭
マツチの消し跡もへに。殊更くらく寂莫たり。折柄宮殿の
中に物音聞へ。人のさゝやく様子あれば。我が僻耳にもあ
るやらんと。鎮り居けるに。いづれにも心得ぬ事共なり。と
へ山影の宮とはいへど。市街に近き此邊を。函嶺以西と云
なれど。今開明の世の中に。妖怪變化のあるべきあり。狐狸
の業にありとするも。まど霄の間の事に一あれば。いと審

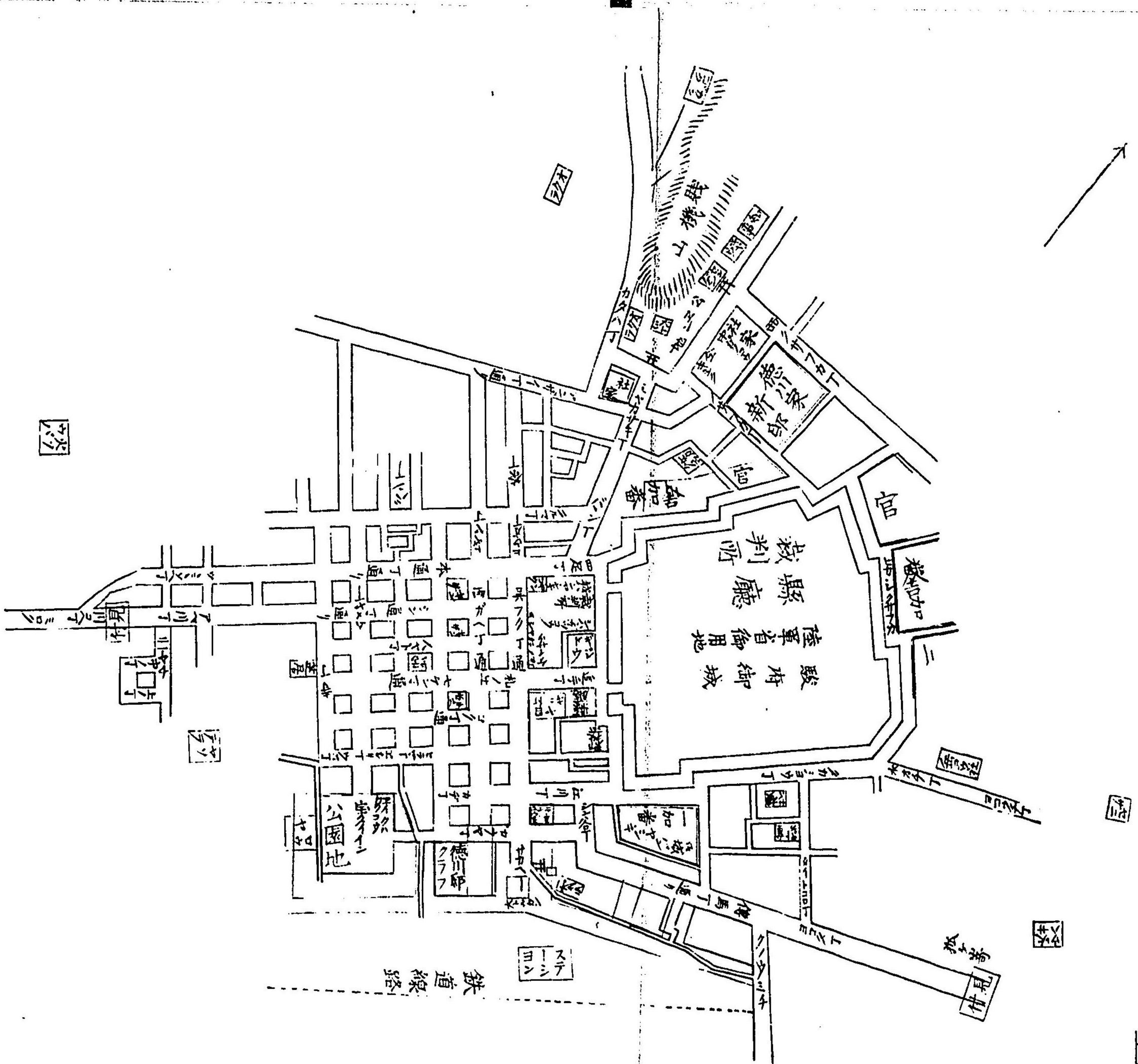
環甲者爲
誰、非東照
公、則義元、
烏帽直垂
者爲誰、非
且元、則元、
忠、而總髮
便服者、余
知其爲松
雪也、作者
以爲如何、

三
く思へども。素より膽力にも富たる旅人は。何程の事あ
らむと。やと立上り見顯し吳んと。拔足さし足椽の上。足も
とばかり踏こめつゝ。墨塗の蔀格子の間より。内の様子を
望み見つ。眸を定めて窺へど。燈火もあらず。月影もあらず
れば。分明には認め兼ねたれど。おぼろ氣ながら人あるに似
たを尙よを見るに。甲冑を被たる大將あぞ。烏帽子直垂に
て。座するもあぞ。總髪にして。平服のものもあぞ。凡七八人
の人類あるが如しと雖も。何分何等の評議をするや。知る
によしあり。靴を隔てかゆきをりくの思ひあぞ。定て是の
當地の縉紳り。當時流行の假裝會の。大趣向にもあるやら
んり。夫もまたうたがはしく。何とも思案にあさはせして
驚かさんはさすがにて。又もとの椽先に。箕踞をいめつゝ

夢耶非夢
真耶非真
文如莊子
極變化、語
似離騷、最
幻妙、

息をよめ。腕を又き。晝の勞れを憩ひたり。いま此談か
やかあれ。そは次回中巻。過去の物語を讀得て知らむ。

三世譚上現世之卷終



墨 現在
 朱 未來
 青 過去

鉄道線路

駿府御城
陸軍省御用地

縣廳
裁判所

船加番

公園地

煙草

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

船加番

明治廿一年十二月六日印刷
同年同月十六日出版

正價金貳拾五錢

發行所 靜岡吳服町三丁目
靜岡大務新聞社

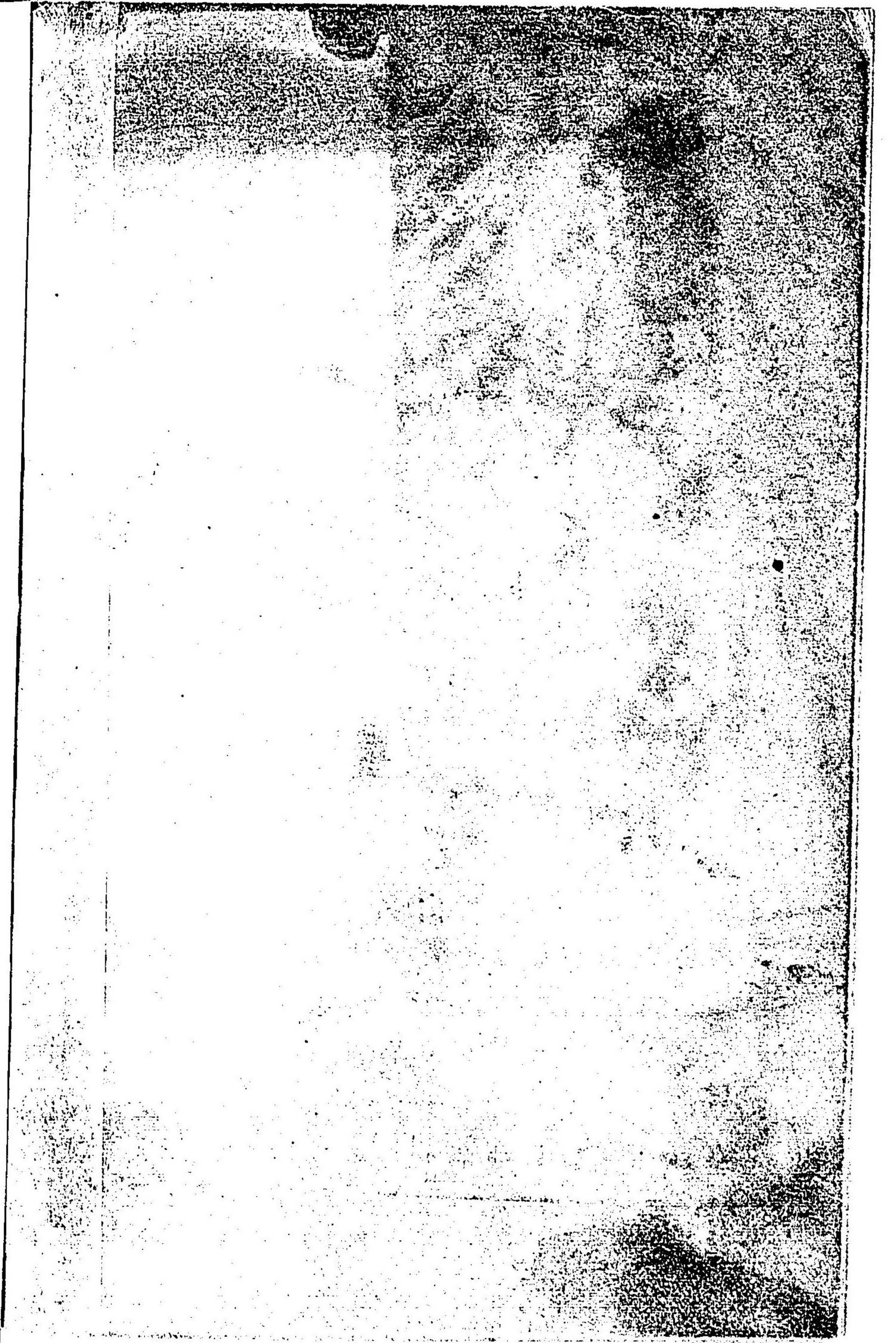
發行者兼印刷者 靜岡追手町
山梨易司

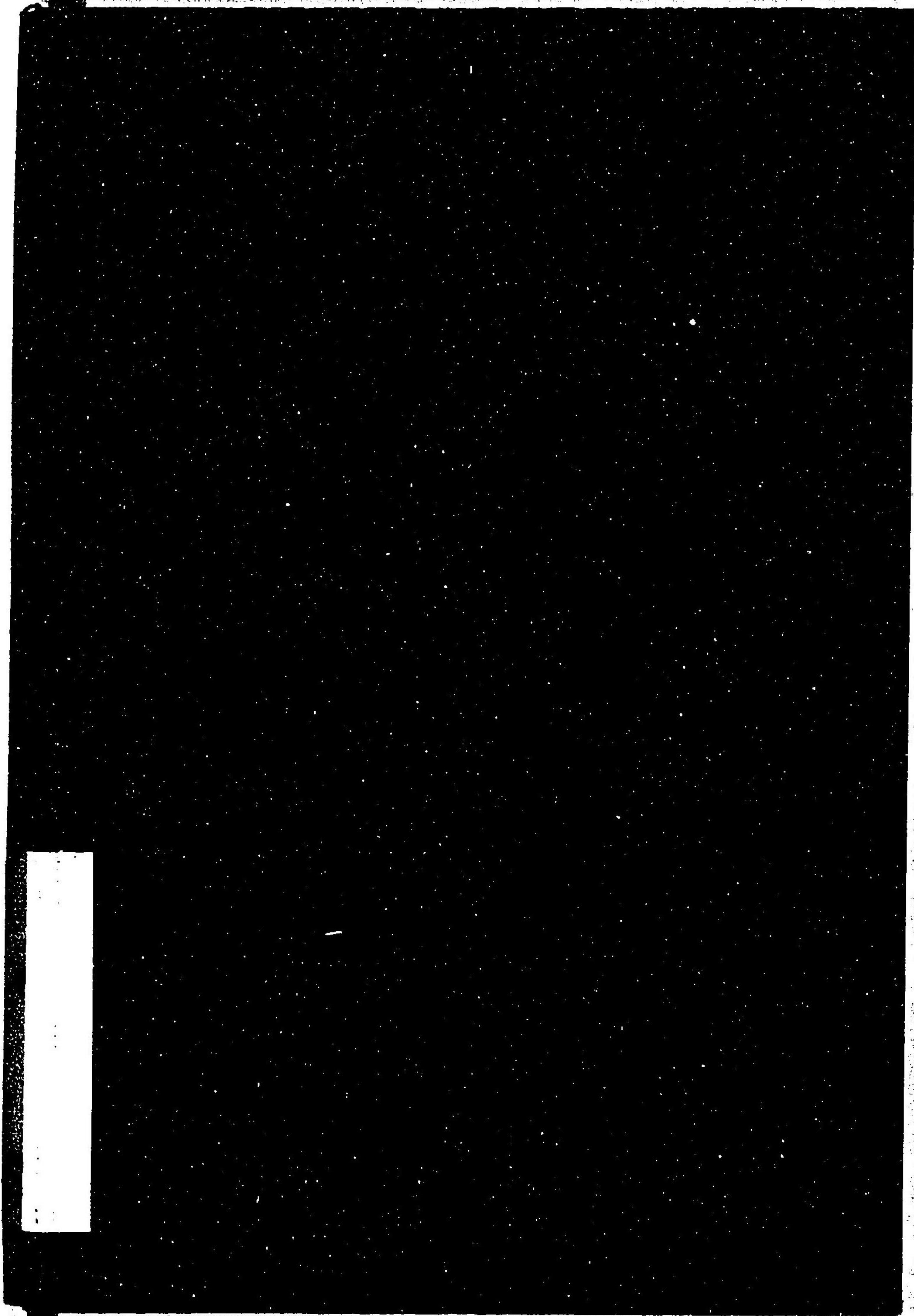
發賣所

靜岡 廣瀬市 藏
同 吉見義次
同 青木榮次郎
同 三浦定吉

濱同見同袋掛同藤同沼三同同同同同同同
松附井川枝津島
驛驛驛驛驛驛

齋龜小守木小育杉關吉朝靜齋今杉文勝佐
藤杉野杉山成日岡藤津本林見藤
源甲成伊彦伸英契森伴新岡茂右衛門助七店助平
三亮伊彦伸英契森伴新岡茂右衛門助七店助平
郎堂平堂平作社郎社郎郎社





1111

特45
29

三世譚

国立国会図書館

027327-000-9

特46-29

静岡風俗三世譚

花咲爺／編

M21

ADJ-0080

